

ドイツ自伝小説と敬虔主義：『ハインリヒ・シュ ティリングの伝記』と『アントーン・ライザー』へ の考察

伊藤，利男

<https://doi.org/10.15017/2332670>

出版情報：文學研究. 79, pp.99-152, 1982-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ドイツ自伝小説と敬虔主義

—『ハインリヒ・シュティリングの伝記』と
『アントーン・ライザー』への考察—

伊藤 利 男

- 一 敬虔主義と自叙伝
- 二 作者 略 伝
- 三 『ヘンリヒ・シュティリングの幼年時代』とその続篇
- 四 『アントーン・ライザー』

一 敬虔主義と自叙伝

シュトゥルム・ウント・ドラング期のドイツにおいて、二人の作家が、それぞれ自分の前半生を素材とする小説を発表して、読書界の注目をあつめた。それは、ヨーハン・ハインリヒ・ユングの『ヘンリヒ・シュティリングの幼年時代』——ある真実の物語』(一七七七)に始まる連作(『青少年時代』一七七八、『遍歴時代』一七七八、『家庭生活』一七八九、以下略^①)と、カール・フィリップ・モーリツの『アントーン・ライザー』——ある心理学小説^②(第一部・

ドイツ自伝小説と敬虔主義(伊藤)

一七八五、第二部・第三部・一七八六、第四部・一七九〇）である。この二作家によってドイツの文学に本格的な自伝小説の分野がひらかれた、ということができよう。

自伝小説の原型として自叙伝があることは、ことさら指摘するまでもないが、ドイツの自叙伝の歴史をふりかえって見るとき、敬虔主義者たちが培ってきた自叙伝記述の伝統が、とりわけ注目される。

それでは、敬虔主義者たちは、どのような人々であったのか。ゲーテは『詩と真実』第一部第一巻で、少年時代にうけた宗教教育に関連して、「私たちに伝えられた教会のプロテスタントイスマスは、本当のところ無味乾燥な道德の一種でしかなく、その教えは魂にも心にも訴えることができなかつた。だから公の教会からは実にさまざまな離脱がおこなわれた。教会離脱主義者、敬虔主義者、ヘルンフト派、『国のうちに穏やかに住む者たち』⁽³⁾、その他いろいろな名で呼びならわされている人々が生れたが、これらの人々はみな、神に接近することが公の宗教の形式ではあまりできそうに思われなかつたので、特にキリストを通じて、もっと神に接近しようという意図をもっていたにすぎない」と述べているが、彼がここに挙げた、「敬虔主義者」以外の人々も、広い意味ではみな敬虔主義者たちの仲間にかぞえ入れることができよう。ゲーテの右の言葉は、敬虔主義者たちの志向の根本を適確にとらえている。というのも、ルターの宗教改革から百数十年の歳月をへて、プロテスタント教会それ自身が正統化・体制化し、信仰が形骸化空洞化し、その一方で、無神論的風潮がはびこる情況を目のあたりにして、創成期のキリスト教に見られたような敬虔な信仰を現代に復興し、教会をふたたび眞の信仰者たちの集まる場にしようとするのが、敬虔主義がおこる根本的動機だったからである。その際、若きルターの改革理念の実現が、敬虔主義者たちの目標となり、ドイツ神秘主義者たちの思想遺産から多くのものが摂取されて理論形成をたすけた。また、外国における先駆的な、あるいは並行的な改革運動、たとえばイギリスのピューリタニズム、オランダのプレチジスムスは、ドイツ敬虔主義にとって、いわば案内人の役をつとめた。カトリックの神秘主義もまたさまざまな影響を及ぼしたが、特にフランス静観派神秘主義の

代表者グイヨン夫人⁽⁴⁾の思想が、教会離脱主義者たちに与えた影響は大きかった。

狭い意味での敬虔主義は、フランクフルト・アム・マインのルター派牧師シュペーナー⁽⁵⁾によって創められた。彼は一六七〇年同地において、「敬虔の集い⁽⁶⁾」と呼ばれる私的祈禱修養集会を初めてひらき、七五年には教会の現状を批判し、改革の必要を説き、改革の方策を提議する『敬虔なる要望⁽⁷⁾』を発表したが、これによって宗教革新運動としての敬虔主義は方向性を与えられ、組織的な展開への第一歩を踏みはじめた。その際シュペーナーは、あくまでも教会内にとどまって、教会を内部から改革することを目標にした。彼の口添えによってハレ大学教授となったフランケ⁽⁸⁾は、同大学をいわば敬虔主義の本山へと築きあげ、かたわら貧民学校、孤児学校、医薬品分配所等の施設をつくって、社会的実践活動に力をつくした。彼の思想に共感し、事業に協力した一群の人々は、ハレ派敬虔主義の名で呼ばれた。彼の孤児学校の出身である伯爵ツインツェンドルフ⁽⁹⁾は、ヘルンフトに同胞教団をつくり、これを地上における神の子らの王国たらしめようとした。このヘルンフト派は、海外布教にも積極力に乗りだし、北米大陸にまでも数次にわたって宣教団を派遣した。西南ドイツのウエルテムベルク地方には、右の二派のように組織的でも集团的でもないが、いわゆるウエルテムベルク派敬虔主義者たちが、独自の活動をおこなっていた。ベンゲル⁽¹⁰⁾、オーティンガー⁽¹¹⁾に代表されるこの派の特徴は、聖書至上主義にあった。また主にドイツの北西部では、改革派教会のなかにも敬虔主義的な活動がおこなわれていた。その代表的人物がテールステージェン⁽¹²⁾である。この最後にあげた二つの系統の敬虔主義者たちには、「国のうちに穏やかに住む者たち」と呼ばれる人々が多かった。

このような各派に属する人々に対して、教会離脱主義者は多くの場合、神秘主義的唯心論の流れをくむ人々であつて、しばしば急進的敬虔主義者とも呼ばれる。彼らは、急進的な思想・信条のゆえに自分から教会を離脱するか、あるいは異端のかどで追放されて、信仰と真理探究の道を独自に切りひらいていったが、彼らのもとに少数ながら熱烈な信奉者が集まって小集団をつくることもあつた。ウイトゲンシュタイン伯爵領のベルレブルクは、領主カジミール

の寛容政策によって、いろいろな種類の教会離脱主義者が集まり住んだ町として有名である。

敬虔主義は、まず市民階級のあいだに広く深く滲透していったが、貴族階級の一部にも共鳴者ないしは庇護者を見出した。なかでもハレ派敬虔主義は、プロイセン王国を中心に勢力をのびしたが、一七四〇年に啓蒙主義に近しいフリードリヒ二世（大王）が即位するに及んで、急速に衰退の方向にむかわざるをえなかった。他の敬虔主義の諸派は、なお暫くの間は活動を続けるが、やがてハレ派と同じ運命をたどることになる。しかし、市民階級のなかにいったん根をおろした敬虔主義的なもの考え方や生活態度は、その後も生きつづけて、やがてくる市民文化の時代の基盤を培う栄養素のひとつになったことは、疑いをいれない。

ところで、敬虔主義者たちが試みた改革は、単に宗教面にとどまらず、生活全般にわたるものであったが、そのすべてに先立つものとして、人間それ自身の変革が求められた。人間変革を通じて、教会の、社会の、世界の改革を裏現させることが、彼らの目標である。では、その人間変革とはどのようなもので、どのようにして可能になるのか、まず人間変革の原理ともいべきものから見ていきたい。この点に関して、シュペーナーはルターの『ローマ人への手紙』への序言』中の次の言葉に注目した。「信仰は私たちの内部でおこなわれる神の業わざであって、それは私たちを変化させ、神によって生れかわらせ、そして古いアダムを殺して、私たちを心、気持、考え、あらゆる力において、まったく別の人間にする」¹³これは要するに、信仰と人間変革はともに神の業、恩寵であって、両者は不可分であるという思想である。さて、周知のごとくルターは、「信仰のみが義とする」¹⁴という義認論を彼の神学の中核にすえたが、それに対してシュペーナーは、神によって生れかわること、つまり新生ないし再生を最重要視する。人間は再生して、つまり神の子となって、初めて地上に神の王国を建設することができる、というのである。その意味で、敬虔主義はまず再生運動として出発する。再生は、すでに見たように、人間一人一人の内部でおこなわれる神の業であるから、教会の仲介は排除されて、人間は救いを直接神に求めなければならない。ここから、正統派教会の僧侶中心体

制をすて、万人祭司主義が採用されることになるが、この万人祭司主義はルターの理念をそのまま継承するものである。こうして教会は、敬虔な信者たち、真の信仰を求める者たちの集いとして生れかわることが目標になり、その手始めとしておこなわれたのが、私的祈禱修養集会である。ここで人々は祈り、聖書を読み、信仰について語りあった。神の言葉である聖書は、信仰の道、生活の指針を教えるものであるから、聖書を神の意に則して正しく読むことが要請され、ここに、これまでの神学の主流であった教義学に代って、聖書解釈学が重視されることになる。その意味で敬虔主義はひとつの聖書運動であり、これまたルターの聖書至上主義を受けつぐものである。教義学を支えていたものが理知や博識であったとすれば、神に祈り聖書を正しく読むために必須なものは、我意をすてた素直な心である。理知・学識偏重に対する心情重視は、敬虔主義の著しい特徴であるが、しかしその延長線上にはやがて感傷主義が現れてくることを、指摘しなければならぬ。

人間が再生して神の子になるということは、現実にありうるのか、あるいは単なる幻想にすぎないのか、という問題は別にして、敬虔主義者たちが正統派の人々とは別の人間になったことは事実であって、それは彼らの生活態度に明瞭に表れていた。というのも、神の子であるという自己神聖視は、その反面で世俗との断絶をともなうからであり、ほとんどすべての敬虔主義者たちに世俗蔑視ないしは世俗逃避の傾向、厳格主義的・禁欲主義的モラルを認めざるをえない。たとえば小説や詩などの文芸作品は、芝居やダンスその他の娯楽同様に、信仰にとって有害無益な中間物として、書くことも読むことも禁じられた。しかしこのような反文学的態度は、ただちに彼らが非文学的であるということを意味するものではない。彼らに許されたごく僅かな文学的領域、すなわち讚美歌、自叙伝、伝記、説教などにおいて、彼らは自分たちの文学的才能を遺憾なく発揮することができたのである。

さて、そのうちの自叙伝であるが、敬虔主義者たちは非常に多くの自叙伝を書きのこした。しかしそれは分量的には、『詩と真実』など後世のそれとは比較にもならない慎しやかなもので、「履歴⁽¹⁶⁾」と呼ばれていた。履歴というの

は、もともととは葬式の際、埋葬説教に続いて朗読される故人の履歴のことであるが、敬虔主義者たちはしばしば、他人の手で作られた履歴よりも、生前に自分で書いた履歴が朗読されることを好んだのである。このような自署履歴のうちで最も古く最も有名なものの一つとして、シュペーナーの『自署履歴』⁽¹⁶⁾が伝えられている。彼はここで、従来の履歴の様式を踏襲して、誕生、洗礼、家系、初等教育、大学生活、教養旅行、職業、結婚、事業と順次記述していくが、その際注目すべきことは、この履歴が単なる年代記的事実の羅列というよりも、むしろ内的体験の記録であることである。その一例をあげると、彼は十三歳のとき、彼の代母であつて、彼の宗教的情操に大きな感化を及ぼしたラッポルトシュタイン伯爵夫人の死に出会ふが、それを次のように回想する。「神は、私の魂をいち早く俗世の虚栄からひき離すための特別の手段として、奥方をも利用されました。一六四八年十一月私は、卒中のためすでに八日間ひとことも口をおききになることができず臥つていらした奥方のもとへ、お亡くなりになるその日に呼ばれましたが、奥方が私になにか話そうと空しく努力されるさまに、私は心を揺り動かされ、そのあと私は、自分もまたすぐさまこの世を去りたいという、いちづな思いにかられました。こうして私が長いあいだ毎日ひたすら神に祈つて、私を死なせて、と要求したことは、たしかに行きすぎであり、私はその非を認めますが、しかし神はこのような私の弱さをも利用して、このような若年の時期に現れる虚栄の願望を早くもこのとき挫かれ、心を未来のもろもろの財宝へ向けさせたもうたのです」⁽¹⁷⁾

この回想には、敬愛する人を失つた少年シュペーナーの心情の動きが十分にうかがわれるが、同時にまた敬虔主義者に独特なものの考え方も表れている。それはまず、俗世は虚栄であり、人間の心は俗世に執着している限り、未来のもろもろの財宝に目を向けることができない、という思想である。未来の財宝とは、眞の信仰の実りとして結果する諸価値を意味する。そこで問題は、心はどのようにして俗世からひき離されるかという点であるが、シュペーナーによれば、それは神の業であつて、その際、神は人間、あるいは人間世界のあらゆる事象を道具、あるいは手段とし

て利用するといふのである。彼はラッポルトシュタイン夫人をまさにそのような神の道具として把握しているが、この把握と表裏一体の関係にあるのが、先慮信仰と呼ばれる敬虔主義者特有の人生観である。それは、人生のすべての歩みは神の摂理、彼らが好んで用いる言葉でいえば、先慮によって正しい目標に導かれる、という思想であつて、彼らの人生態度、したがつてまた人生解釈ないし人生把握は、この先慮信仰によつて規定される。シュペーナーの『自署履歴』もしばしばこの神の先慮に言及しているのである。

しかし先慮信仰に関して問題は、先慮は常に正しいにせよ、人間は事に際して予め神の意志をどのようにして知ることが出来るか、という点である。一六六六年、シュトラースブルクで副牧師をしていたシュペーナーは、フランクフルト市から牧師兼長老職の地位を提供されたとき、まさにこの問題に直面したが、その解決は次のようになされた。「この件において神の意志はどのようなものであるか、私の心には十分な確信がなく、また私自身の判断にも親しい友人たちの助言にも信用をおくべき理由がなかつたので、私はひたすら受身の姿勢をとつて、シュトラースブルクとフランクフルトの両市に私のことを話しあつて折りあいをつけて貰おうと決心し、事実、自分からはどちらの側にも決定の動機を与えないよう自戒し、諾否それぞれの理由を文書にしたため、私を一番よく知っているシュトラースブルク市に提出して、決定を要請しました」⁽¹⁸⁾ここに見るような是非決定法の根柢にあるのは、人間は自分の意志を完全に否定して初めて神の意志を知ることが出来る、という思想である。これと同じ是非決定法は、ペーターゼン夫妻、^(18a)その他多くの敬虔主義者たちの自叙伝にしばしば見られるところである。

ところで、シュペーナーが従来の習慣に反して、あえて履歴を自署して自分の葬式で朗読させたのは何故か、という問題を考えてみなければならぬ。思うに、それは彼が、他人の手になる履歴では遺徳を讃える言葉などによつて自分の人生が歪んだ形で伝えられることを、恐れたからであろう。自分は多くの弱点をもつた人間であるが、それにもかかわらず神は自分を正しく導いて下さつた。この神の恩寵の大きき、先慮の正しさを人々に伝えて、人々を信仰の

道へ促すためには、自分の弱点も喜んで衆目にさらそう。こういう気持が彼に『自署履歴』を書かせたのであろう。つまり彼は、信仰促進の目的をもって、この小さな自叙伝を書いた、と見ることができらる。

自叙伝に信仰促進の効果をより明白に認めて、積極的に利用したのは、フランケである。彼は『A・H・フランケの回心の発端と経過』⁽¹⁹⁾と呼ばれる履歴を書いたが、一六九二年三月その写しを彼の師シュペーナーに送り、同封の手紙で次のように述べている。「先日は、無信仰ゆえに苦悩している人の手紙をお送り頂きましたので、私の『回心の発端と経過』をここに同封いたしますが、それというのも、先例というものはより多く人を動かすからです。(中略)何と申しても大切なのは、理知が信仰に服従すること、また人間は自分の力でそれを得たなどと自慢せず、神があらゆるものを憐れみたまうことを誇りに思うことです」⁽²⁰⁾

フランケの『回心の発端と経過』は、すでに見た敬虔主義の再生の理論に対して、その実例とも呼びうるものであって、誕生の時から筆をおこして二十四歳で回心して再生するまでをえがいている。紙数の関係で詳しい分析は避けるが、要するにこれは、神学を修めて信仰の必要性を知り、信仰を獲得したいと願いながらも、理知に妨げられて疑惑と不安になやむ青年が、絶望のあまり身を投げだして神に救いを求めた瞬間に、心のなかに神の存在を確信し、回心するまでの記録である。回心はあくまでも神の恩寵によっておこなわれた、というのが彼の確信であって、もし人間の側に何らかの前提条件があったとすれば、それは彼がいっさいの世俗的欲望を圧殺して、つまり自己を完全に否定して、神に祈ったことだけである。彼はこの間の心の動きを明細に観察して、それを素朴な言葉で力動的に描写するのである。

敬虔主義は、このような心の動き、心の中に欲望がうごめくか、神の光が射しこんでいるか、常に観察することを、指導的人物のみならず平信徒たちにも要請した。また、そういう信仰に関する自己の内面生活を手記にしたためることが、信仰促進の手段として奨励されて、敬虔主義は多数の自署履歴、すなわち自叙伝を産んだのである。しか

し時代の進展とともに、その敬虔主義からも離反する人々が出てきたことは、歴史的事実である。彼らは世の批判攻撃に対して弁明の手段として、あるいは自分が発見した新しい真理を主張する手段として、しばしば大きな自叙伝を書いた。その際、敬虔主義によって養われた内面観察、心現分析の技術が有力な武器になったことは、いうまでもない。

以上概観した敬虔主義の自叙伝記述の伝統と展開の延長線上に、ユングとモーリツの自伝小説をおいて、それぞれの特徴をさぐるのが、本稿の意図するところである。

二 作者略伝

ユングの名前をわが国の読者は、ゲーテによって初めて知ったにちがいない。ゲーテのシュトラースブルク遊学時代をえがく『詩と真実』第二部第九巻は、彼の新しい交友に多くの紙数をさいているが、そのなかで一七七〇年秋、新しく彼の食卓仲間にくわわったユングのことを、次のように紹介している。「新加入者たちのなかに特に私の興味をひく男がいた。彼は名をユングといい、のちにシュティリングという名前ですまず有名になったあの男である。彼の容姿は、時代おくれの服装にもかかわらず、ある種の武骨さをもちながらも、何か繊細なところがあった。(以下略)」

ユングは一七四〇年九月十二日、ドイツ中西部ナッサウジーンゲン侯国のヒルヘンバッハ教区に属する山村グルントに生れた。父は小学校教師兼仕立屋を職としており、母は教会を追放された元牧師の娘だった。彼らが同居している父方の祖父母の家は農業を営み、祖父は労働日には山にこもって炭焼きに従事していた。ユングが一歳半ころ、生来からの弱かった母が世を去り、その悲嘆のなかで敬虔主義の影響を強くうけた父は、幼い息子にきわめて排他的かつ厳格主義的な教育をほどこした。教区の牧師は、ユングが十歳のころ、父親を説得して彼をヒルヘンバッハのラテ

ン語学校に入学させた。彼が十一歳のとき、祖父が屋根の葺きかえ仕事ちゅう地面におちて死亡した。『幼年時代』はこの祖父の死までの出来事を書きしるしている。

ラテン語学校へ通学するかたわら、父の裁縫仕事の手伝いをさせられていたユングは、一七五五年五月、前記牧師の推薦で近くの村の小学校教師になった。村人たちはこの十五歳の少年教師に満足していたが、その年の秋、村の長老が彼に解職を申しわたした。家へ帰ったユングは、父のかたわらで裁縫に専念しなければならなかったが、しかし程なく、グルントから歩いて九時間の距離にある村の鉄工場主から家庭教師に招かれ、五六年正月その新しい職についた。この仕事はわずか三か月しか続かず、彼は、その間に再婚して別の村へ移り住んだ父のもとへ、ふたたび戻って、手仕事や農作業に従事しなければならなかった。このような教師業と手仕事の交替が数回くりかえされているうちに、一七六二年の復活祭がやってきた。せまい故郷での生活に見切りをつけたユングは、見知らぬ土地で運命をきり開くべく、故郷を離れて、運を天なる父にまかせて、北西方向に位置するルール南部の町エルバーフェルトをわざわざ歩いていった。以上の体験は『青少年時代』に詳細に語られている。

こうして『遍歴時代』に入ったユングは、エルバーフェルトでは職を見出すことができず、そこから南西方向のゾーリンゲンへ赴いて、ある仕立屋の親方のもとに職人として住みこんだ。しかし、それから程なく彼は近くの町の商人に求められて、その家へ家庭教師として移り、しばらくしてその家を脱出して、今度はまた別の町の仕立親方の職人にやとわれた。親方は熱心な敬虔主義者で、彼はこの親方およびその信仰仲間たちと、胸襟を開いて交際した。六三年九月、クレールウィンクラープリュッケの鉄工場主フレンダーの懇望と親方の勧めによって、彼はフレンダー家に家庭教師として住みこみ、約七年間をここで過ごすことになる。彼は家庭教師の仕事のほかに、工場管理と農場経営をも委ねられて、次第に経営実務に精通していった。そして二十八歳ころからは、余暇を利用して医学の独習を始め、たまたま紹介されたあるカトリック僧から眼病治療の秘法を伝授された。それをフレンダー家の使用人の子供の

眼疾に試みると、みごとに成功したので、彼は今までの職務のかたわら眼医者を始めたと、近在の町村一帯に名医の評判がたつた。フレンダー氏は彼に、なお数年間は自分のもとに留まって独学を続けたのち、どこかの大学へ行つて試験を受け、医学博士になつて帰つてくることを提案したが、彼自身の希望は、大学で正規に医学を基礎から学ぶことであつた。七〇年夏、彼はフレンダー家に別れをつけて、ローンズドルフの商人ハイダーのもとへ移つた。前年秋から彼は、二週間おきに週末を利用してローンズドルフに出張診療をしていたが、その際の常宿がハイダー家であり、この年二月には彼は、同家の長女クリスティーネと婚約していたのである。ハイダー氏にはユングを大学へやるだけの資力はなかつたが、彼は「神様がご配慮してくださる」と確信して、シュトラースブルク大学に赴いた。七二年三月医学博士となつてローンズドルフに戻るまでの一年半は、本来の目的である医学修得とならんで、ゲエテ、ヘルダー等のやがてドイツの新しい文学を代表することとなる人々を友人として彼に与えたという点で、重要な意味をもつと言えよう。

七二年五月、彼は新妻クリスティーネとともにエルバーフェルトに移つて医者を開業するが、その体験は『家庭生活』で詳細にされる。医者としてのユングは、結局のところ成功しなかつた。彼は眼科の領域、なかんづくそこひの手術にすぐれた手腕をもち、生涯におよそ二千の患者を手術したということであるが、もちろん失敗例もあつた。ゲエテは『詩と真実』第四部第十六巻で、フランクフルトの素封家フォン・レルスナーにそこひ手術を施すべく同市を訪れてゲエテ家の客となつたユングのことを語り、その手術に失敗した彼の傷心を詳しく描いているが、患者の社会的地位が高く金持であるような場合に失敗が多く、貧乏人の治療はたいへい成功した。彼は貧しい患者からは報酬をほとんど受けとらず、支払い能力のある金持の手術は失敗したので、家政はいつも火の車で、借金がふえるばかりだつた。こうしたなかで七八年、彼はカイザースラウテルンに新設された政経大学の教授に招聘された。担当は農業経営、工業、商業および獣医学だつた。彼はフレンダー家での経営実務の経験をもとに、この方面の研究をつづけて、

論文をある学会に寄せていたのが認められたのであった。彼が新しい職について三年後に、最愛の妻が二人の子供をのこして病死した。一年後に彼は、かねて知りあいのゾフィー・フォン・ラロッシュ夫人の世話で、その姪ゼルマと再婚した。八四年、カイザーラウテルン政経大学がハイデルベルク大学に吸収合併されたのにもなって、彼はハイデルベルクに移り、さらに三年後の八七年にはマールブルク大学に招かれて経済学、財政学、会計学の講座を担当することになった。なお、教職のかたわら眼科治療だけは生涯つづけられた。

このマールブルク時代の生活を描くのは、『修業時代』である。家庭内の最大の事件は、九〇年に二度目の妻が産後に死亡したこと、神学部教授コーイングの娘エリーゼを三番目の妻に迎えたことである。他方、教授としてのユングは、経済学等の専門の学間に次第に違和感を覚えはじめ、かわりに宗教のために献身したいという欲求が強くなってきた。八九年のフランス革命のあとは、彼は革命的ないし進歩的な志向をいなく同僚教授や学生たちのなかで、次第に孤立していった。一八〇三年ユングはバーデン選帝侯から枢密官廷顧問官の称号と年金を与えられて、「宗教的著述と眼科診療に専従する」⁽²²⁾ため、ハイデルベルクへ帰った。

『ハインリヒ・シュティリングの老年——ある真実の物語。ハインリヒ・シュティリングの伝記第六卷』は、彼のハイデルベルク到着から約一年間の生活を書いたところで中断されたが、その後の主な異動は、〇六年彼がバーデン選帝侯の居住地カールスルーエに移住したことくらいである。一七一七年四月二日、ユングリッシュティリングは同地において七十七年の生涯をとじた。

モーリツの名を初めて日本で紹介したのも、またゲーテにちがいない。一七八六年十月二十九日イタリアの都ローマに到着したゲーテは、程なく、彼と相前後して同地に着いたモーリツと初めて知りあった。『イタリア紀行』は一七八六年十二月一日付けで次のように誌している。「アントーン・ライザーとイギリス徒歩旅行⁽²²⁾によって、私たちの注

目をひいたモーリッツが、ここに来てゐる。純粹な、すばらしい男だ、つきあつて大いに楽しい」ゲーテはワイマルへの手紙でもしばしばモーリッツのことを書いてゐる。同年十二月十三日付けのヘルダー夫妻あての手紙には、「例の徒歩旅行者モーリッツがここへ来ていますが、腕を折つてたいへん苦しんでいます。私たちもみな気の毒に思つてゐます。彼はまったく善良で、ものわかりがよく、苦勞をかさねて実によくできた人物です」モーリッツは乗つていた馬が足をすべらせて転倒したために負傷したのであつた。翌十四日付けのシュタイン夫人あての手紙にはこう書いてある。「腕の骨折でまだ臥つてゐるモーリッツは、ぼくが見舞いにいくといつても、自分の身上話をいろいろ話してくれましたが、それがぼくの人生とあまりによく似てゐるので、ぼくは驚きました。彼はぼくの弟のようなものです。同じ性質なのです。ただ運命によつて、ぼくが寵愛され引き立てられてゐるところで、彼は見放され痛めつけられてゐることだけが違ふのです。だからぼくは、ぼく自身の身上を特別に回顧せずにはゐられませんでした。最後に彼が、自分はベルリンから遠く離れたために最愛の女友達を苦しめた、と告白するに及んで……！ ああ、これだけでは言い足りません！」 同月二十三日シュタイン夫人にあてて、「モーリッツの『アントーン・ライザー——ある心理学小説』をぜひお読みください。この本はぼくにとつて多くの意味で貴重なものです」 八七年一月六日付け同夫人あて、「モーリッツのもとも今帰つたところです。今日は、骨折した腕の包帯をとりました。気分も大変いいし、工合も良好です。この四十日間、悩める男のかたわらで、付添人兼聴罪師兼腹心の友として、大蔵大臣兼秘書等々として、ぼくが学んだことが、將來かならず貴女のお役にもたつてでしょう」 同月二十日、同夫人あて、「モーリッツはぼくの前に置かれた鏡のようなものです。彼が苦痛のまつただなかでぼくに語り、恋人を捨ててきた、精神の、心からなる友情の、その他もろもろの凡庸ならぬ交わりを絶つてしまつた、別れも告げず立ち去つた、自分の市民としての立場を放棄してしまつた、と告白したときの、ぼくの氣持を想像してください」

ゲーテにとつてかくも近い存在となるカール・フィーリップ・モーリッツは、七年戦争が始まつたばかりの一七五六

年九月十五日、北ドイツはウェーザー河畔の町ハーメルンに生れた。父ヨーハン・ゴットリーブは軍楽隊に勤務する下士官級のオーボエ奏者で、母ドロテー・ヘンリエッテは、父の後妻であった。異母兄が二人いたが、モーリッツがまだごく幼いころに、すでに徒弟奉公に出された。下にその後四人の弟妹が生れたが、うち二人は幼時に死亡した。父は以前はかなり放縦な生活を送っていたが、先妻が死ぬとともに、突然人が変わったように信心ぶかくなつて、前述のグイヨン夫人を崇敬する教会離脱主義者である貴族フライシュバイン⁽²³⁾の信奉者となり、年に一度、湯治場として有名なピュルモントにあるこの教祖の邸を訪れて教えをうけていた。それに対して母親は、敬虔主義の影響を少しばかり受けてはいるものの、教会に忠実なルター派プロテスタントであつた。一家の経済は赤貧と呼ぶにふさわしく、夫婦のあいだに争いが絶えなかつたが、その最大の原因は、二人の宗教観のちがいに根ざしていた。

一七六三年、一家はハノーファーへ移転した。父は息子を学校へは行かせず、読み書きを自分で教え、フライシュバインによつてドイツ訳されたグイヨン夫人の著作やその他の宗教書を読ませた。八歳のとき彼は結核性の重い感染症にかかり、それが一応おさまつたあと数日して、こんどは脚に激痛と瘍傷をともなう腺病性疾患があらわれた。この病氣は彼を十二歳まで苦しめた。この十二歳の年は、彼の生活に大きな変化をもたらした。というのは、父は知人たちに説得されて息子を市立学校のラテン語無料授業にかよわせたが、息子の学習がようやく調子にのつてきたところで、それをやめさせて、その秋、ブラウンシュワイクの帽子製造業者でやはりフライシュバインの信奉者であるローベンシュタインのもとに、徒弟として住みこませたのである。きびしい労働そのものは、彼にはむしろ楽しく感じられたが、抑圧や屈辱にうちひしがれる機会もおおかつた。七〇年春、彼は自殺未遂事件をおこして、親もとへ帰された。

やがて十四歳になつたモーリッツは、ハノーファーにある村部小学校教員養成所付属の授業料無料の学校に入れてもらつて、ふたたび勉学をはじめ、さらに翌年の春には摂政カール親王の奨学金を支給されて高等^{ギムナジウム}中学校に入学を許さ

れた。そのころ父は、軍樂隊を退いて遠くの村に書記の職を見つけ、家族をつれて引越したので、市内に一人残ったモーリツは、ある教師の家に下宿し、食事は後援者たちが交代でそれぞれ毎週日をきめて、無料で出してくれることになったが、この無料賄いはしばしば彼に非常な屈辱感を与える機縁となった。これまで敬虔主義的、あるいはより詳しく言えば靜觀主義的なしつけを受けてきたモーリツ少年は、このギムナジウムで彼にとっては新しい啓蒙主義的なものの考え方をまなび、ラテン語、作詩その他に才能を発揮し、栄光を獲得する機会もときにあったが、しかしその一方で、彼の貧困はしばしば彼に屈辱的な、あるいは絶望的な思いをいだかせた。

こうしたなかで彼は演劇の世界にはじめて触れることになる。「時はあたかもドイツにおける最も輝かしい俳優たちの時代」^(23a)、演劇熱にとりつかれたモーリツは、とうとう最後には俳優になる決心をかため、七六年七月、ひそかにハノーファーを脱出して、道を南に進んだ。チューリンゲン地方を巡業しているエックホーフの劇団に加入することが目的だった。ようやく訪ねあてたエックホーク劇団は、彼を役者としても座付作者としても入団させることを拒んだ。途方にくれたモーリツは、たまたま出会った人々の好意により、エルフルトの大学に入学を許されて神学の勉強をはじめたが、数か月もするとまたもや俳優志望が頭をもたげ、彼はある二流の劇団と契約する話をとりきめた。七七年二月はじめ、その劇団のあとを追ってライプツィヒへ赴いたモーリツが、そこに見出したのは、興業成績不振のため座主から見すてられた一座の人々であった。以上が、『アントーン・ライザー』全四巻にえがかれたモーリツの経歴の概略である。

これ以後もなお自分のあいだ、モーリツの彷徨はつづく。彼は二月十一日バルビーのヘルンフト派敬虔主義者たちのもとに現れて一週間滞在したのち、ウィテンベルクに赴いて、同月二十七日から翌七八年春まで神学部学生として生活し、つづいて、啓蒙主義的教育家として知られるバゼドー⁽²⁴⁾がデッサウに設けた汎愛学校に職を求めたが、バゼドーと激しく衝突して、彼の企図は失敗した。そのあと彼は重い病気にかかり、一時は死を考えたが、回復し、同年七

月ポツダムポツダムの軍人遺児養護院の助教となり、さらに同年十一月にはベルリンに移って、ツーム・グラウエンクロスタ
ー高等中学校下級学校に教師の地位をえ、七九年には同下級学校副校長になり、のちにはまた高等中学校の授業も委
嘱され、八四年高等中学校教授に任命された。教育活動と並行して、彼は教育学、心理学、ドイツ語学、文芸学、美
学等の研究をはじめて、多数の論文をあらわした。

フリードリヒ二世治下のベルリンは、啓蒙主義文化の一中心地であった。モーリツは哲学者モーゼス・メンデルス
ゾーン(25)、カント学者ザロモン・マイモン(26)、あるいは医師マルクス・ヘルツ(27)とその妻ヘンリエッテ等の一流人士と親
交を結ぶようになった。

この間、七九年には彼はフリーメーソンの団員に採用され、八一年職人の階級にすすみ、八四年親方マイスターとなり、八
九年演説ブルトイレドナー士レドナーの地位につき、さらに九一年から九二年まで第一エルスター・アウフゼアー監督をつとめた。その間の九二年五月から
八月まで彼はイギリスを徒歩旅行し、翌年『一七八二年一ドイツ人イギリスを徒歩旅行する』(28)を出版した。同じ八三
年、彼は『経験心理学のための雑誌』(29)を創刊した。

八六年八月八日モーリツは学年の途中にもかかわらず、校長にも無断でベルリンを出発してイタリアに向った。動
機は、友人の鉱山顧問官シュタントケの妻への窓の傷手から逃れて新規蒔きなおしをはかるためだった。同様の動機
からイタリアへやって来たゲーテとのローマにおける交遊は、すでに後者の手紙に見たとおりである。ローマではの
ちにヘルダーとも知りあった。八八年十月ゲーテに少し遅れてイタリアを去ったモーリツは、十二月四日から翌年一
月三十一日までワイマルのゲーテ家の客となり、シラー、ウィーラント、カール・アウグスト公爵、シュタイン夫人
などと親しく交わった。二月一日公爵に同道してベルリンへ帰ったモーリツは、ゲーテと公爵のとりなしによって同
月二十二日ベルリン芸術大学の芸術理論の教授に任命された。ほかに古代学、神話学についても講義をしたが、彼の
聴講者のなかにはアレクサンダー・フォン・フムボルト、ワッケンローダー、ティークなどがいた。

九一年四月彼はプロイセン王国宮廷顧問官の称号を授与され、同年十月にはさらにベルリン学士院会員に選任された。九二年六月、彼の著作の出版者マツドルフの妹クリスチアーネ・フリデリーケと婚約、八月に結婚したが、この二十歳年下の妻が以前の愛人に誘拐されるという事件があつて、同年十二月離婚した。翌年四月、別れた妻と再婚、二か月後の一七九三年六月二十六日、モーリッツは肺病が急に悪化して、三十六年の生涯を了じた。この年、まだ無名だったジャン・パウルの処女作『ヴッツ先生万歳』³⁰が、モーリッツの推輓によって世にあらわれた。

三 『ヘンリヒ・シュティリングの幼年時代——ある真実の物語』とその続篇

『幼年時代』の成立について。ゲーテは『詩と真実』第二部第九巻で次のように述べている。「この人々（||敬虔主義者たち・筆者）は、仲間どうしでは実に雄弁であつて、あらゆる心情の問題について、それがどんなに繊細なことでも、またどんなにしたたかなことでも、それ相応に気持よく語る事ができた。善良なユングも同様だった。かならずしも同一の考えをする人たちではなくても、彼の考え方に不快を示さない少数の人たちの間では、彼は話好きだったばかりか、能弁でもあつた。特に自分の身上話をきわめて快適に物語り、聞く者にあらゆる状況を明確に、まざまざと眼の前に見るような思いをさせるすべを心得ていた。私がそれを書きしるすよう勧めると、彼はそうすると約束した」

ユングはこの約束を忘れずに、エルバーフェルトで医者を開業した当初の数週間のうちに身上話を手記にまとめ、これをシュトラースブルクの「文芸の仲間」（||ユングが所屬していた文芸愛好学生たちのグループ³¹）へ送るとともに、その写しを手もとに残していた。『家庭生活』によると、七四年七月ライン地方を旅行中のゲーテはエルバーフェルトに旧友を不意に訪問して喜悅させたが、このときゲーテはこの手記の原稿を受けとり、「家に帰ってゆっくり読

むことができるよう」⁽³²⁾持ちかえった。七七年のある日、シュティリング(＝ユング)のもとへ千十五ライヒスターラーの金を同封した封書が届いた。「彼は驚いて手紙を開いて読んでみると——彼の知らないまに友人ゲーテが彼の身上話の最初の部分を、シュティリングの幼年時代という題をつけて印刷させたことが分った。そしてこれはその印税だった」⁽³³⁾

このようにゲーテの尽力によって世に出た『幼年時代』は、著者の名を記していなかった。この作品を好意的に受けられた読書界では、匿名の作者をめぐって様々な臆測がなされたが、程なくそれが医師ユングであることが曝露された。しかし彼は『青少年時代』以下の統篇でも匿名をおし通し、ようやく『修業時代』にいたって、その巻末に『シュティリングのこれまでの伝記への回顧』⁽³⁴⁾なる一文を付して、その最初の部分で、「この五巻すべての著者である私、すなわち宮廷顧問官ユングがハインリヒ・シュティリングその人であること、従ってこれは私自身の物語であることは、どなたもご存じである」と書いている。ユングはさらにこの『回顧』のなかで、『幼年時代』以下の執筆の動機について、次のように述べる。「私が、印刷するつもりなど全然なしに、ただある若い人々の集りで朗読して貰うためだけに書いて、そして私がまったく知りも望みもしないうちに、ゲーテによって印刷に回された手記——『シュティリングの幼年時代』は、思いもかけなかった、信じられないほどの大評判をまきおこした。私はしきりに勧められたので、エルバーフェルトで『シュティリングの青少年時代』と『遍歴時代』を続けて書いた」⁽³⁵⁾

この『回顧』の文章と右に引いたゲーテの回想を較べてみると、それぞれの思惑のあいだに微妙な違いが認められる。ゲーテがユングに身上話を書くことを勧めた理由を想像してみると、それは後者が単に「きわめて快適に物語る」ことができたからだけではなく、それ以上に、そのようにして語られた内容が興味深かったからにちがいない。それは都会育ちのゲーテが、他の友人たちからはほとんど聞くことのできなかつた農山村の生活であり、文明に毒されていない自然であり、貧困ゆえにさまざまな境遇におかれながらも向上心に燃える少年の教養体験などであって、

ゲーテはこれこそ印刷して世の人々に提供するにあたいすると考えたのであろう。一方、ユング自身は「印刷するつもりなど全然なしに、ただある若い人々の集りで朗読して貰う」ことを目的としていたというのであるが、それではその朗読は具体的には誰を対象として、どのような効果を狙っていたのであろうか。その点を明らかにしてくれるのが、一七七九年にある読者にあてたユングの手紙の次の一節である。「私は、シュトラースブルクの友人たちが軽佻浮薄なフランス趣味をどんなに好んでいるか、また彼らの信仰の基盤がどんなに揺らいでいるか、知っていたので、彼らに私の身上話をロマン的な花模様の衣裳に包んで提供したならば、神の先慮の明白な足跡が好ましい方法で示され、彼らは読むことを楽しみ、得るところが多いであろう、と信じました」(傍点は筆者) 要するに、ユングはこの手記を信仰促進の目的をもって書いたのである。先慮信仰が敬虔主義者たちの人生観の中核をなしていること、彼らが信仰促進の目的をもって自叙伝を書いたことは、すでに述べた。ユングの意図は、まさに敬虔主義の先人のそれに倣うものである。

他方、シュトラースブルクでユングの身上話をきいたゲーテは、そのなかに敬虔主義的なものの考え方を明瞭に聞きとったであろうことは、想像にかたくない。それは一七六八年十一月二十四日付けランガーあての手紙からも明らかのように、ライプツィヒから療養のためフランクフルトに帰ったゲーテは、ヘルンフト派の敬虔主義者たちの集りに出入りして、このような考え方を熟知していたからである。しかしまた、彼がすでにシュトラースブルクへ向けて出発するまえに、敬虔主義と精神的に絶縁していたことも、『詩と真実』第三部第十五巻に見るとおりである。その点を考慮すれば、ゲーテがユングに身上話を書きしるすよう勧めたとき、それによって人々の信仰を促進することをゲーテ自身が狙っていたとは思われない。

ところで、ユングは身上話をしるしているとき、これが小説であることを、まったく意識していなかったようである。彼にとつては、『幼年時代』以下の連作はすべて、その副題が示すように、「真実の物語」であり、「手記」にすぎな

ったのである。彼は『家庭生活』のなかで、『幼年時代』が世にあらわれたあと人々が彼をゲーテと同様な無神論者^{フレイグハイト}として白眼視し、「彼を小説の主人公とか、空想家と呼んだ」⁽³⁸⁾ことを不可解なこととして、憤慨しているが、それともいふのは、自分は信仰促進のために真実の物語を書いたのであって、決して小説を作ったのではない、と信じていたからであろう。小説が創作された架空の物語としてまだなれば娯楽品と同列視されていた当時にあっては、彼の憤慨もある程度むりからぬことではあるが、しかしこの手記が同時に小説でもあることは、物語の構造そのものが証明している。

ユングは、「身上話をロマン的な花模様の衣裳に包んで提供した」のであるが、この「衣裳」が単なる「手記」を小説化するのに大きく貢献したであろうことは、疑いをいれない。彼は『回顧』のなかで、「一番重要な問い、つまり、(中略)私が物語った身上話のすべては本当に実際に真実なのか、という問いに対して、私は心安らかに『はい』と答えることができる。『幼年時代』の物語では、人物たち、その性格、ならびに物語そのものは、ありのままに記述され描写されているが、しかしその中にはいろいろな装飾が見えている。それというのも、当時の目的が装飾を必要としたからである。(中略)ただ人名と地名だけは、やむをえないある種の顧慮から、架空の名前の下にかくさなければならなかった」⁽³⁹⁾と述べているが、「装飾」はさきの引用中の「衣裳」と同義に解することができる。それはいずれも、事実を装飾するものとして創作的要素をもつことはたしかであろう。人名と地名を架空の名前の下にかくすことも同様である。しかし「手記」を小説化するのに決定的な働きをしたのは、ユングが自身の名前をヘンリヒ・シュティリングという架空の名前の下にかくしたことである。この操作によってユングという一人物は、シュティリングという物語の主人公と、「私」と名乗って主人公の身上を物語る語り手におのずから分割されることになる。この語り手は匿名の人物であり、透明人間のごとくに他人から姿を見られることなしに、物語のあらゆる場面に出現して、その情景を観察する自由をもっている。彼は、たとえばシュティリングの両親が結婚するまでの経緯を詳細に物語

り、結婚式の情景を、その場に居合わせた者のごとくに写實的に描写するが、もしその「私」が著者ユングその人であるとすれば、このような描写は時間的物理的に、また生物学的に言つて、不可能なはずである。ということは、つまり、「私」と名乗るこの語り手もまた創作された人物であることを意味する。このように、創作された語り手が語る創作された主人公の物語、これは小説の形式にはかならない。

『シュティリング』の物語が小説であるということは、しかしながら、その主人公と語り手がともに作者ユングの分身であることを否定するものではない。その際、主人公と語り手がまったく別の人物に分離されていることは、いま述べた通りであるが、この関係は自伝小説の原型である自叙伝のなかにすでに内在している。自叙伝は、著者が自分の過去の体験を回想して物語るといふ一つの文学形式である。ここでは、語り手も主人公ともに「私」という代名詞によつて表わされるが、しかしこの「私」は、物語る「私」と物語られる「私」とにはっきり分離される。この二種類の「私」を分離させるのは、体験の当時と物語る現在との間に横たわる時間である。当時の「私」はもはや現在の「私」とは別人なのだ。

さて、ユングは過去の自分をシュティリング *Stilling* と命名したが、この名前は「国のうちに穏やかに住む者たち」 *die Stillen im Lande* に由来することは明らかである。彼はこの名前によつて、主人公の敬虔主義的傾向を暗示するのである。

しかしながら、『幼年時代』の物語の基調音は、必ずしも敬虔主義的ではない。たしかに主人公の父親は、作者略伝で述べたように、敬虔主義に深入りして息子をその原則に従つて教育するが、しかしそれは、祖父を中心とするシュティリングの大家族全体の雰囲気の中にあつて、何か異質のものという印象を与えている。もともと舞台となるナッサウリジーゲンの山村地帯は、改革派教会によつて素朴で敬虔な信仰が培われてきた地方で、十七世紀の末に入つ

てきたといわれている敬虔主義の要素は稀薄である。敬虔であるということと敬虔主義とは厳密に区別しなければならぬが、そういう伝統的な敬虔な信仰の代表者として、やや理想化されて描かれているのが、この巻の最大の脇役である祖父エーバーハルトである。彼は、「父祖の神」⁽⁴⁰⁾を信じて、自分たちの毎日の生活を支えてくれる「永遠の慈悲」⁽⁴¹⁾に感謝をささげ、勤労に励んで分相応の貯えもできた老家長である。これに対して、この老人の息子で、主人公の父となるウィルヘルムは、すでにある程度まで敬虔主義的なものの考え方にそまっている。それは、彼が最初に登場する場面、つまり両親に結婚の許可を求める場面に明らかである。脚の不自由な息子と貧乏で力仕事にたえられない少女の結婚に、父親として当然の懸念をいだく老家長は、将来どうやって生活していくつもりか、息子にたずねる。答えは、「ぼくは自分の仕事（＝裁縫業）で何とかやっていくつもりです。それから先のことはすべて神様のご先慮にお任せします。ご先慮は、空とぶ鳥たちみんなを養ってくださるのと同じように、ぼくとぼくのドルトヘンを養って下さるでしょう」⁽⁴²⁾（傍点は筆者）息子のこのような樂觀的な先慮信仰に対して、父は全面的に賛同することはできない。彼はこう答える。「ウィルヘルムよ、お前がしようとしていることが、どんなことであるか、考えてみよ。それは並たいていのことではない。お前の先祖の神様が、お前とお前の嫁に必要なものすべてをお恵み下さるよう！」⁽⁴³⁾父は息子の安易な先慮信仰を戒しめて、息子の将来のために父祖の神の慈悲を敬虔に祈念して、結婚を許す。

老シュティリングは敬虔主義に対すると同様、既成の教会の権威主義に対しても批判的な姿勢を堅持している。既成教会の権威主義はこの場合、教区の牧師シュトルバインに体现されている。物語が進行して、ウィルヘルムとドルトヘンが結婚し、二人の間に主人公ヘンリヒが生れるが、その洗礼のあとの祝宴に招かれてきた牧師は、些細なことに腹をたて、こんな百姓どもと一緒に食事をしたくない、という。すると老シュティリングは、「牧師様、それならば申しあげねばなりません、お前様はキリストのしもべなんぞでは決してない、パリサイ人です。パリサイ人は取税人や罪業深い人々の家へいって一緒に食事をしました。パリサイ人はどこへ行っても小さく賤しく卑屈でした。

牧師様!・・・私の老いて白くなった髪が逆立ちますぞ。席におつき下さい、さもなければお帰り下され・・・」と激しく抗議するのである。

このようなシュテイング家の宗教的環境に突然変化をもたらしたのは、主人公の母の死であるが、それを述べるまえに、この母の性格を観察しなければならない。彼女は虚弱体質のうえに、軽い憂鬱状態におちいりやすい。常に「哀愁の歡喜」⁽⁴⁵⁾をあじわって、涙にかきくられる。太陽が美しく昇るのを見ては泣き、また沈むのを見ては泣くというぐあいに、特別の原因もなしに、わけもなく涙を流すのである。このような感傷性に、当時ドイツでも愛読されたイギリスの感傷主義文学の影響を見ることは、容易であるが、それを割り引いても、彼女の心の感じやすさは否定できない。問題は、ヘンリヒがこの母の「顔だちとやさしく感じやすい心を全面的に受けついでいた」⁽⁴⁵⁾ことである。

ドルトヘンはある日夫とともに森を散歩して帰ったあと発熱して病床にふし、二週間後に死亡した。最愛の妻を失ったウィルヘルムは、悲しみに打ちひしがれて、どんな慰めの言葉も受けつけず、ひたすら亡妻の思い出の中に生きるという状態になった。そのため祖母が幼い主人公の衣食の世話を見、叔母たちは、「彼の手を引いて歩かせ、お祈りと、敬虔な章句を唱えることを教えた」⁽⁴⁶⁾が、しかし彼が「何物にもまさる愛」⁽⁴⁶⁾をもって親しんだのは祖父であった。祖父は孫といっしょに遊びながら、「人間にとつて尊敬にあたいするもの」⁽⁴⁶⁾は何かということをし、教えこむすべを得ていたのである。

やがてウィルヘルムの状態にも変化がきざしてきて、彼は悲しみのうちにも家族のものたちに心を開いて、亡妻のことを好んで話題にし、「彼女の思い出のなかに歡喜の情を感じ始めた」⁽⁴⁶⁾。そのとき彼に接近してきたのが、ニクラスという敬虔主義者である。この男は神学を修めたが、しかしあらゆる宗教体制に欠陥を発見して、それを批判する言論活動をしたために投獄され、釈放後は教会離脱主義者と見られる「敬虔な人々の集団」⁽⁴⁷⁾に加入して、彼らが経営する織物工場の製品を近在の町村に行商しながら、自分の信条を説いてまわっていた。改革派教会に忠実なシュテイリ

ング家の人々は、彼の言葉に耳をかきなかったが、ウィルヘルムだけは例外だった。彼の傷ついた心は、この世のほかない快楽をすてて、決して誤ることのないキリストの教えに従うことよって、永遠の真の慰楽を手にいれよ、というニクラスの説教に容易に動かされた。彼は、「世のすべてを捨てて、階上の一室に子供と二人だけで住みたいという、魂の奥底からの欲求」に、逆らうことができなくなり、生活のため裁縫仕事をしながら、敬虔主義の教えに則して、「永遠を目ざさない心のいつさいの傾きを抑えつける」⁽⁴⁸⁾ 修練に専心した。そして同時に、この原則にしたがつて、みずから息子の教育を始めたのである。

生活習慣のしつけは、次のようなものであった。「彼は朝四時に起床して仕事を始めた。七時になるとヘンリヒをおこし、目をさますとすぐに、天使たちを遣わして夜中ちゅうお守りくださった神様のご慈悲を忘れないように、と優しく注意した。『神様にありがとうと言いなさい！』と言いながら、ウィルヘルムは子供に服を着せた。それが終ると、子供は冷い水で顔を洗わなければならなかった。それからウィルヘルムは子供を手もとに呼びよせ、部屋の扉をしめきって、いっしょにベットの前にひざまづき、心の底から熱烈に神に祈ったが、そのときしばしば彼の目からしきりに涙が床に流れた。そのあと子供は朝食を与えられ、まるで王子様の御前みたいに、行儀正しくきちんと食べなくてはならなかった」⁽⁴⁹⁾

読書については、父は息子にまず教理問答書を読ませて、それを暗記させ、さらに子供が理解できる程度の世俗的ならびに宗教的な物語本を与えた。前者は『オクターヴィアヌス皇帝』や『美しいメルジーネ』などの民衆本であり、後者としてはアルノルトの『古への教父たちと敬虔な人々の生涯』⁽⁵⁰⁾、ライツ編の『再生した人々の物語』⁽⁵¹⁾等の敬虔主義者たちのいわば必読書が与えられた。その反面で父は息子に他の子供たちと遊ぶことを固く禁じた。その理由は恐らく、他の子供らは世俗の子であり、世俗の罪悪からわが子を守らなくてはならない、という敬虔主義的な警戒心からであろう。しかしこのことは、子供なりに必要な社会適合の機会を主人公から奪うことになる。そこで彼の興味の

対象は、物語の世界に限られざるをえない。その結果どういふことになるか、語り手は次のように心理学的観察をする。「彼の魂のすべては空想的なものに興じはじめ、彼の想像力は高められたが、それというのも彼の想像力は空想上の人物や事件よりほかのどんな対象も与えられなかつたからである。美德を誇張して描かれた古い物語詩の主人公たちが、手本とすべき対象として彼の心についてのか根つき、悪徳は最大の嫌悪の対象となつた。けれども彼は、いつも神様や敬虔な人々の話を聞かされていたので、知らず知らずのうちに彼の視点はひとつところに固定して、そこから万事を観察した。一人の人物の話を讀んだり聞いたりしたとき、彼がまづ先にする質問は、その人物が神様とキリストに対してどのような気持をもっているかということだつた」⁽⁵²⁾

彼の空想癖は遊びの世界にも及んでくる。たしかに彼は近隣の子供と遊ぶことは厳禁されていたが、父の監視の目が届く範囲内で果樹園や森を散歩することは許されていた。果樹園や森は彼にとって、「純粹に空想上の風景」⁽⁵³⁾となり、「そこにはエジプトの荒野があつた。彼は藪のひとつを洞窟につくりかえて身をひそめ、聖アントニウスを思い浮かべ、恐らくそれに感激してであろう、心から祈りをささげるのだつた。別の場所にはメルシーネの泉があつた。サルタンとその娘、美しいマルセビラが住むトルコがあつた」⁽⁵⁴⁾（後略）

このような空想癖とならんで、父の厳格主義が息子に与えたもう一つの性格は、小心性である。「ウィルヘルムは非常に厳しかった。息子が自分の命令に少しでも違反すると、彼は管でもって仮借なく折檻した。そこでいま述べた土台（＝空想癖）に加えて幼いシュティリングの魂のなかに、ある種の小心性が入りこみ、そして息子は体罰を恐れて自分の過失をかくそうとして、つい嘘をついてしまうようなことになつてきた」⁽⁵⁵⁾

以上見てきたように、ヘンリヒは母から受けついで感じやすい心の上に、父の教育方法がもたらした非社交性、反世俗的態度、空想癖、小心性というようなものを、いわば第二の天性として身につけた。このような性格が彼ののちの実生活において、しばしば世間との関係を狂わせる素因になることに、予め注意しておかなくてはならない。しか

しながら、このような問題点についての叙述は、『幼年時代』の物語全体のなかでは、むしろ小さな部分を占め、より多くの描写は、舞台となった山村の地理、自然、風景、その中で祖父を中心する素朴な人々の生活ぶりに向けられていた。さらにこの物語を特色づけるものは、随所に巧みに織りこまれた古い民謡、物語詩、民話、昔話などである。ユングはこれらのものの文学的価値をシュトラースブルクでヘルダーやゲーテの口から聞かされていたにちがいない。その意味でこの作品の成立に新しい時代の、つまりシュトゥルム・ウント・ドラングの精神の影響を認めなければならぬ。他方、これらの構成要素をさしてユング自身は、「ロマン的な花模様の衣裳」と呼んだと見ていいだろうが、しかしこの衣裳が、彼が目ざした本来の目的、すなわち「神の先慮の明白な足跡」を示すという目的を多分に覆いかくしていることも否定できない。発表当時、この衣裳を見て楽しんだ読者のうちに、『幼年時代』がやがて大がかりな敬虔主義的自伝小説となる『ハインリヒ・シュティリングの伝記』の序章であることを看破したものが、はたして何人いたであろうか。いずれにせよ、物語の本来の目的は、『青少年時代』以後、巻を追うことにあらわになってくる。

ヘンリヒの父親が彼を敬虔主義的な信仰をもった人間に育てようとしていたことは、すでに見たとおりであるが、しかし人間は信仰によってのみ生きるものではない。そこで父は息子のためにパンを得る道、すなわち職業の配慮もしなければならなかった。彼は息子がラテン語学校へ通いはじめたころ、自分自身の手仕事、つまり裁縫を習わせたが、ヘンリヒ自身が職業について初めて考えるのは、十二歳ころのことである。『青少年時代』の最初の部分にこう書かれている。「こうして時は知らぬまに流れ去り、やがて彼はラテン語学校から次第に遠ざかって、父の手仕事を手伝わなくてはならなくなった。しかし手仕事は彼には大変な苦痛だった。彼はただ書物のなかのみ生きていたので、自分には読書のための時間が十分与えられていないように思っていた。だから彼は、いつかは学校教師になりた

いと、言いようもなく慣れた。それは彼の目に、自分がいつかは手に入れられる最高の地位と思われた。牧師になるなどという考えは、おのれの分際を遙かに超えるものだった。しかし時たま身を躍りあがらせて説教壇にのぼった自分の姿を想像し、生涯を書物のなかで送ることができたならば、どんなに幸福なことだろうか、思いめぐらせると、心はひろがり、彼は無上の喜びにつらぬかれた。そんなとき彼はしばしばこう思った。神はこのような衝動をわけもなくぼくの心に植えつけられたのではない、ぼくは落着いていよう、神はぼくをお導き下さるだろう、そうしたらぼくは神にしたがうのだ⁽⁵⁴⁾」

ここに挙げられた三つの職業、つまり手仕事、学校教師、牧師はいずれも人間社会に不可欠な職業であって、神の前には同等の地位にあるはずである。にもかかわらず主人公は明らかにそこに貴賤の差を設けている。このような職業観が世俗的名誉心から生れていることは、彼が初めて勤めた学校教師の職を免じられて父の手伝いをするとき、心の状態を述べる次の言葉からも明らかである。「今やヘンリヒ・シュティリングに苦痛が力いっぱい襲いかかった。彼は仕立屋になるため生れてきたのではない、と固く信じていた。それで彼はそうやって坐って縫いもの⁽⁵⁵⁾をすることを心から恥ずかしく思った。だから誰かりつばそんな人が店へはいつてくると、彼の顔は赤くなった」

世俗的名誉心は、とりわけ敬虔主義者たちにとっては、真の信仰を妨げるものとして圧殺されねばならないものであったが、しかし主人公の頭の中では、神から与えられた才能という觀念と不可分に結びついている。彼が九歳になるころ、その神童ぶりを伝え聞いて訪れた教区牧師が彼に、どういってお祈りするの⁽⁵⁶⁾か、と尋ねたところ、彼は、「神様、ぼくに何を誦んでも解るように、どうぞ利口な頭をお授けください、と祈ります」と答えた。つまり、幼いヘンリヒは、才能は神から与えられるものと信じていたのである。今十二歳の彼は、「おのれの分際を遙かに超えた」職業を夢想する「衝動」を心中に感じて、それを神から植えつけられたと信じるのである。そして、略伝で見たように、彼は何度も教師職と手仕事の間を往復するが、三度目の学校をやめて父の家へ戻った十八歳のとき、父の前でこ

う言うのである。「神様はぼくの魂に衝動と志望を植えつけられながら、その神様のご先慮が、ぼくが生きている間は、それを充たすことを拒まれるとしたら、まったく恐ろしいことです！」⁽⁵⁷⁾

「先慮」という言葉を彼自身が口に出しているのは、これが初めてであるが、しかしこの言葉がこれまでも常に彼の頭に浮んだであろうことは想像にかたくない。要するに、自分が利口な頭をもっているのも、高級な職業への衝動を感じるのも、すべては神の意志、先慮によるのだという絶対的な信念が、世俗的名誉心呼びおこすのである。このような先慮信仰は、たしかに敬虔主義的ではあるが、しかしまたいかにも樂天的かつ自己中心的といわなくてはならない。そして彼が、自分のこのような職業観が「悪魔的な高慢」⁽⁵⁸⁾に由来する誤りである、と初めて気づくのは、二十一歳でまたしても学校を失敗して、ある牧師を訪れて身のふり方を相談したときのことである。彼は、「落着いて裁縫仕事を続けよう、もう二度と虚栄の願望をいなくまい」⁽⁵⁹⁾と固く決心して父のもとへ帰ったが、しかしこの決心の実行は、依然として至難のわざだった。というのも、つらい仕事を続けるうちにやがて、またもや新たにラテン語学校に就職の話がもちあがると、彼の心は期待にふくれあがったからである。しかしその件も不成立に終り、いよいよ生活に行きづまったヘンリヒは、「見知らぬ土地へいって、神様がぼくをどうなさるおつもりか、見てとらなくてはならない」⁽⁶⁰⁾と悟って、一七六二年の復活祭に故郷を出奔するのである。

自分に対する神の意図を知らなくてはならないという発想は、明らかに敬虔主義の先慮思想に由来する。『遍歴時代』に入った主人公には、そういう神の先慮を直接体験する機会が繰りかえし現れる。その第一回目は、彼が故郷を去って三日目に早くも訪れた。見知らぬ町で文字通り路頭に迷った彼は、幸運にもある仕立屋の親方のもとで働く口を見出して窮地を脱することになったが、そのときの彼の心境を物語は次のように述べる。「さて彼は、その晩、寝床につくと、わが身の変転と天なる父の誠実な先慮について思いめぐらせた。どこへ行くという計画もなしに自分は故郷を離れた、先慮は自分を三日間慈悲深く導いてくださり、そして自分は三日目の晩にはふたたびこうしてご配慮

を受けている。『手仕事は神の貴とい贈物だ、黄金の土壌をもっている』という、父からしばしば聞かされた言葉が、どんなに大きな真理であるか、今や彼にわかった。彼はこのすばらしい天職をあんなんにも嫌っていた自分に腹がたってきた。彼は心から神に祈り、その恵みふかい導きに感謝して、眠りについた⁽⁶¹⁾。

それから十三週間がすぎたころ、主人公は神秘的な回心を体験する。そのいちぶしじゅうは次のとうりである。「七月なかばのことだったが、彼は日曜日の午後シャウベルク（＝実名ゾーリンゲン）の町の小路を歩いてた。太陽が気持よく輝き、空にはここかしこに雲が浮んでいた。彼は深く考えこむでもなく、頭に特別な考えが浮んでくるわけでもなかった。ふと目をあげると、頭上を白い雲が一つ流れていくのが見えた。それに目をとめると同時に、彼の魂はある未知の力にみだされ、彼は心底から気持がよくなった。彼は全身が震えて、ほとんど立っていることができなくなって、膝を屈した。その瞬間から彼は、神の名誉のため、隣人たちの幸福のために生き、そして死にたいという気持が、どうにも抑えられなくなるのを感じた。人間たちの父への、神に遣わされた救い主への彼の愛は、またすべての人間たちへの愛は、その瞬間、もし必要とあらば自分の生命をも喜んで犠牲にしたいと思うほど、大きくなった。同時に彼は、自分の考え、言葉、行いを監視して、そのすべてが神意にかなない、神に気に入られ、神の役にたつものになるようにしたいという抵抗しがたい衝動を感じた。彼はその場で神と決して取りけすことのできない盟約をかたく結んで、これからは自分をひたすら神の導きにまかせて、二度と虚栄の望みをいだくことなく、もし自分が生涯職人のままでいることが神のご意志であるならば、喜んでそれに満足することを誓った⁽⁶²⁾」

この回心の場面をたとえばフランケのそれと比較するならば、興味ある観察ができようが、しかし今はその余裕がない。問題は、シュティリングがこの回心を契機として、本当に別の人間になったかどうか、ということであるが、この問いには、この回心の三週間後に始まる彼自身の行動が答えを示してくれる。すなわち、彼は人に勧められるままに、またもや手仕事を放棄して家庭教師になった、つまり神との盟約、彼自身の誓いを破ったのである。語り手は

彼のために弁明して、彼がそのような歩みをしたのは、「蛇の言うことを信じ、そして良心は沈黙した」⁽⁶³⁾からと述べているが、このような弁明は、彼の回心が本物でなかったことの証明でしかないだろう。

いずれにせよ、この家庭教師への転身が正しい選択でなかったことは、彼がこの仕事をふたたび放棄せざるをえなかったことから明らかである。彼は別の町へ行って、イザーク親方のもとへ職人として住みこんだのであるが、イザークがたまたま敬虔なキリスト教徒、というよりもむしろ敬虔主義者であったことによつて、彼の運命は好転する。彼はイザークを通じてこの地方の敬虔主義者たちと親交を結んで信仰を深めることができ、さらにシュパニア（⁽⁶⁴⁾実名フレンダー）家の家庭教師に備われて、それからのちは「世の中で立身出世する」⁽⁶⁴⁾道を歩きはじめたのである。その際、立身出世したいという気持は、もはや根絶されていたはずなのに、またもや手仕事をすてて家庭教師になつたのは、それが神の意志であると認識したためである。シュパニアが彼に申出をしたとき、居あわせたイザークが、固辞するシュティリングを次のように説得する。「今あなたは承諾しなければ、罪をおかすことになります。この申出は神に由来します。これまであなたが就いた仕事はすべてあなた自身に由来していたのです」⁽⁶⁵⁾この言葉を聞いて、「シュティリングは自分をくわしく調べてみた。彼は心中に名譽への情熱ないし衝動を少しも見出さなかつた。逆に彼の良心は、この家庭教師の職は神から自分に指令されているのだ、という目くばせを感じた」⁽⁶⁵⁾のである。

このようにして主人公は安らかな良心をもつて再び家庭教師になり、さらに経営の仕事も引きうけたが、年がたつにつれて、その二つの仕事とも自分の本来の職ではないと感じはじめ、余暇にギリシア語、ヘブライ語を独習しはじめた。その有様を見たシュパニアが、「あなたが何をなすべきか、いま突然思いあたりました。あなたは医学を学ばなくてはなりません」⁽⁶⁶⁾と言いだしたのである。彼はこの言葉に神の目くばせを直感して、医学をまなぶ決心をする。この過程は、数年前にシュパニア家の家庭教師になる決心をしたときと、ほぼ同様である。この過程はその後いわば定型化されて、彼は医者から大学教授になるときも、教授から枢密宮廷顧問官になるときも、同様に神の意志、

先慮の導きを見てとって、喜んでそれに従う。そのみではない。職業と並んで人生の最も重要な選択である結婚に際しても、彼は同じ決定原理にしたがうのである。しかし、彼がとりわけ先慮の導きを感じるのには、経済生活においてである。もともと学資をもたないシュティリングは、略歴に見たように、「神様のご配慮してくださる」と確信して、シュトラースブルクへ出発した。彼は道中でも、また修学中も、さらに医者になつてからも、経済的に窮地におちいることが何回となくあつたが、そのつど人々の好意によつて救われる。その顕著な例を一つだけ紹介すると、一七七六年（と『家庭生活』に書いてあるが、実際は一七七七年）の春、彼は滞っていた家賃の支払いのため七十ライヒスターラーの金を工面する必要に迫られ、神の助力を必死に祈り求めるが、支払い期限が切れる日の朝になつても、何の当てもなく、不安のあまり呻吟するばかりであつた。すでに述べたあのゲーテからの送金が到着したのは、まさにその時である。その時の印象を語り手は次のように述べる。「至高の先慮のこの明白な介入が、シュティリングとその妻の心にどんなに強く働きかけたか、言いようもない。彼らは、もう二度と動揺したり疑つたりせず、あらゆる困苦に辛抱よく耐えようと固く決心した。また彼らは、この真理の光に照らされて、こう悟つた。すべての人間たちの父は、自分たちの手をひいて導きたまうのだ、だから自分たちの道と歩みは神に対して正しい、神はこういう試験によつて自分たちにより高い目的に対する心構えを作らせようと思しめしなのだ、と」⁽⁶⁷⁾

このように主人公は、困難に遭遇するたびに動揺しながら、そのつどそれを切りぬけることができ、先慮信仰はいつそう強くなつていく。七八年カイザースラウテルン政経大学教授に招聘されたときの彼の心境を、『家庭生活』は次のように伝える。「彼は今や開かれた扉から輝く未来をじつと見つめ、観察し、見た——そして自分の天命のすべてを見た。(中略) いつかは教授になるということは、彼の最高の願望ではあつたが、しかしそのようなことを希望することは、これまでついでできなかった。(中略) しかし先慮にとつて不可能なことが、いったい何かあるうか。——先慮は彼にまだほとんど未開拓の新しい原野を授けられたのだ」⁽⁶⁸⁾

この先慮信仰は、彼がバーデン選帝侯から招聘を受けたとき最高にたかまって、彼自身の意志と先慮がほとんど一体化しているような印象を与える。『修業時代』は大公との会見において、宗教的著作に専念する道が彼のために開けたときの情景を、次のように描いている。「シュティリングの人生計画の大いなる展開が、遠いかなたから彼に向ってかくもすばらしく光り輝いてきたこの瞬間——彼がどんな気持がしたか、筆舌につくしがたい。『この件の実現をお急ぎになりますか』と選帝侯は話を続けた。シュティリングは答えた。『いいえ、殿下、ご先慮がいづれかに扉をお開き下さるまで、この件で誰かが苦しんだり不利をこうむることのないよう、お待ち下さいませ』 選帝侯は答えた。『では、半年か一年はまだお待ち下さるのですね』 シュティリングはこたえた。『ご先慮が指図される道を、殿下がお見つけ遊ばすまで、神のお気にめすかぎり、お待ち申しあげます』⁶⁹」

以上見てきたように、ユング・シュティリングの生涯は、年齢がますますとも先慮信仰がますます強まり、それと並行して彼自身は「世の中で立身出世する」道を着実に進むことができた。彼は『家庭生活』で、「だがしかし、私はシュティリングの生活と行状のすべてを書いたのではない、彼を導く先慮の物語を書いたのだ」と述べているが、その限りでは、「神の先慮の明白な足跡」を示そうという、作者本来の意図は十分に達成されたと言うことができよう。しかしその反面で、物語は読むことの楽しみ、小説としての魅力を次第に失って無味乾燥なものになってきたことも、事実として認めざるをえない。『幼年時代』において、作者の宗教的目的を包んでいた「ロマン的な花模様衣裳」が、それ以後巻を追うにつれて、一枚一枚引きはがされていって、代りに作者の素面が次第に露骨に現れてきたのである。その素面とは、先慮信仰、すなわちすでに時代おくれになった敬虔主義のイデオロギーにほかならない。しかし彼自身はそのことに気がついていない。時代は、フランス革命という大事件に端的に示されるように、大きく変わりつつあったが、彼はそれを人々の信仰が稀薄になり、無神論的な風潮が世にはびこってきた結果としか受け

とめることができないで、宗教人として人々の信仰促進の仕事に献身することが自分の使命であるとますます強く信ずるのである。このような時代ないし社会との不適合のそもその原因を、彼自身のなかに求めるならば、彼が幼年時代に父親から受けた敬虔主義的教育の影響、とりわけ社会適合の機会を奪われたということを、想起せざるをえない。

四 『アントーン・ライザー——ある心理学小説』

モーリツはこの小説において最初から制作の目的を明らかにし、全四巻を通じて語り手として同じ姿勢をつらぬいている。

「この心理学小説は、おそらくはまた伝記と呼ぶこともできよう、なぜならば、大部分は実際にあつた人生を観察してえがいているからである。——人間という事象の歩みを知り、初めは小さくて取るにたらないと見えたものが、その人生が進行するうちに、しばしば極めて重要になることがあることを心得ている者は、ここに物語られるいくたの情況が一見卑小なものであつても、それにこだわらないであろう。また、おもに人間の内なる歴史を記述しようとする書物には、登場人物たちが多種多彩であることも期待されないのである。——このような書物は想像力を分散させるのではなくて、それを集中させ、心の視線をそれ自身のなかに鋭く投入させようとするものだからである。——もちろんこれは、そう簡単なことからはないので、この書物でなされるすべての試みが成功するとは限らない——とはいへ、少くとも特に教育学的見地から見て、人間の注意力をより多く人間それ自身のうえに縛りつけ、人間にみずからの個別的な存在をいっそう重要視させようとする努力は、決して無益なものではないだろう」(傍点部は原文でイタリック)

右は『アントーン・ライザー』第一巻に付された前書きの全文である。作者が描こうとするのは、「個別的存在」としての「人間の内なる歴史」であって、先慮の導きの物語ではない。作者の関心は人間そのものであり、一人の人間の——この場合、作者自身の実際の人生の歴史をその内面に立ちいつて観察し記述することが、彼の仕事となるのである。そしてこの仕事は、広く人間教育に貢献しうる、いや、この仕事を通じて人間教育に貢献しようというのが、教育者でもある作者の意図なのである。さて、この仕事にあたって、人間観察の手段となるのが、彼自身呼ぶところの経験心理学である。この経験心理学は、何よりもまず当時の——ウォルフ学派の唯理論的・形而上学的心理学を脱脚した——新しい立場の心理学、つまり心身の相互関係を観察し、物質主義的合理主義的因果律を重視する生理学的心理学に根ざすものであるが、それと並んで重要なことは、彼がその経験心理学のために宗教人たちの、とりわけ敬虔主義者たちの自叙伝あるいは日記を研究資料として用いていることである。彼は自分が創刊した『経験心理学のための雑誌』にそのような自叙伝等からの抜萃を見本として掲載しているが、そのなかでユング・シュティリングその他とならんでアーダム・ベルントの自叙伝が引例されていることが注目されよう。

ベルントは正統派ルター教会の教義を不当に批判したとして宗教局の審問に付され、自分から公職を退いたライプツィヒの元牧師であるが、一七三八年この挫折の生涯をえがいた自叙伝を出版した。この自叙伝については、筆者はさきに概観を試みたので、詳細には触れないが、ベルントの意図は題とびらに記された、「大概はいまだ人に知られざる身体と心情の苦痛を真率に披瀝して、これを平明に解説し、以って無知なるものたちを教育し、学識あるものたちにはいつそうの思慮を促がし(後略)」という言葉が示すように、自分が体験した心身の苦痛という心理学的・生理学的現象を究明して、人間教育に役だてようとする啓蒙主義的なものである。この人間教育への寄与は、モーリツの自伝小説がベルントの自叙伝から継承する志向である。しかしそのような啓蒙精神にもかかわらず、ベルント自身は心身の苦痛が神から与えられたものと信じ、神の先慮に自己を委ねる敬虔主義者でもある。もっぱら生理学的な現

象は別として、実は人間の内面への心理学的観察は、すでにベルント以前から、とりわけ敬虔主義者たちによって深化されてきたことは、すでに本稿のはじめの部分で述べたが、彼らのこの自己の心の状態を観察して、信仰の存否を確める作業によって培われた敬虔主義の信仰心理学を、宗教的目的以外にも応用したのが、ベルントの自叙伝なのである。つまり彼は、信仰生活のみならず、もろもろの世俗的体験をも心と体の両面から観察し記録したのであって、その意味でベルントの心理学は、生理学的心理学の先駆である、ということができよう。

ベルントの自叙伝が、心理学の世俗化の過程を示しているとするならば、モーリッツの『アントーン・ライザー』は、世俗化を完了した心理学の所産と呼ぶことができる。彼はみずからの心理学によってみずからの人生を観察し、その観察の成果をさらに自分の心理学の発展に利用しようと試みた。つまり、彼は一七八三年、『ベルリン月刊雑誌』第二巻に『アントーン・ライザーの身上話の断章』⁽⁷³⁾を、筆者が現在執筆しつつある心理学小説、あるいはむしろ伝記と付註して発表した。同じ年、彼の『経験心理学のための雑誌』の第一巻には、『幼年時代の初期の思出』⁽⁷⁴⁾が掲載された。翌八四年には同じ雑誌の第二巻一部に『アントーン・ライザーの身上話の断章』⁽⁷⁵⁾(右の『ベルリン月刊雑誌』掲載の同名の断章とは別物)が、また同誌第二巻二部には『アントーン・ライザーの身上話の続き』⁽⁷⁶⁾が発表された。そして一七八五年ベルリンのF・マウラー書店から出版されたのが、編者K・Ph・モーリッツの名を明記した『アントーン・ライザー——ある心理学小説』第一巻である。

『アントーン・ライザー』の語り手は、『ヘンリヒ・シュティリングの幼年時代』とその続篇の語り手と同様に、匿名的存在であるが、その物語る姿勢には両者の間にかなり大きな差異がある。『シュティリング』の語り手が最初は目的を隠蔽していたのに対して、『ライザー』のそれは、最初から自分の目的を前面に押しだし、ひたすらそれを追求して、直接それとは関係しない要素をつとめて排除し、全四巻にわたって同じ姿勢をつらぬこうとする。この語り手のなかに作者モーリッツの姿を見ることは容易である。モーリッツは、生れたときから二十歳までの自分を、あたか

も医者が患者に対することがとく、冷静に観察し分析し描写する。しかし、この過去の自分は現在のモーリツとはもはや別人である。現在のモーリツは、この別人としての過去の自分にアントーン・ライザーという名前を与えることによって、自分の身上話を小説にすることができるのである。この主人公の名前は、ユングの場合にくらべて、いっそう象徴的で含むところが多い。アントーンは、かつてユングをも感激させたあのエジプトの聖アントニウス（二五—頃—三五六）に由来する。聖アントニウスは、両親と世間をすてて荒野にのがれ、二十年間孤独な祈りの生活を送り、その徳をしたって彼のもとに集まった多くの人々のために共同生活の組織をつくったことから、僧院制度の父と呼ばれる。姓のライザー Reiser は「旅をする」という動詞 reisen から来ている。旅はかつては巡礼の旅というように宗教的な色彩をもっていて、じじつ作中にも「人生の巡礼⁷⁶」というような表現が見えるが、しかしここでは、「巡礼」という語はすでに宗教的意味を失って世俗の意味に転化している。十八世紀後半の市民社会において「旅する人」といえば、その最も顕著な例は各地を巡業する演劇人たちである。以上要するに、アントーン・ライザーとは聖職にあこがれ、ついで演劇人を志して、そのいづれにも挫折する人間を暗示する名前である。しかしまた、十七世紀のハンブルクには、アントーン・ライザーという名前の神学者が実在して、彼は一六八一年に演劇を宗教的見地からはげしく弾劾する文書を公表したことが知られている。「ライザー」という名前に関して、モーリツはさらにまたもう一つの興味ある操作をおこなっている。彼はこの小説に登場する人名・地名を、ユングのように仮名で呼ぶという方法をとらないで、少数の例外——たとえばゲーテ、ヘルティールというような、すでに著名な詩人など——を除いて、本名の頭文字だけで書きあらわしているが、彼の高等中学校時代の友人でエルフルト出身のライザーの場合は、そのままライザーと記している。ただし、彼の実名はベーター・イスラエル・ライザーというが、作中ではフィリップ・ライザーとなっている。フィリップはもちろんモーリツの呼び名の一つである。つまりモーリツは主人公の家族名に友人のそれを借りてきて、逆に友人には自分の呼び名の一つを与える、という入念な操作をおこなったのである。

『アントーン・ライザー』は作者自身の挫折の前半生を描いた小説である。その点はベルントの自叙伝と同様であるが、しかし挫折のそもその原因として、ベルントが先天的なもの、すなわち「神と自然が私に与えた、というか、あるいは人間の墮罪」の結果として生れながらもっている素質を考えているのに対して、モーリツは後天的なもの、つまり幼年期に外部から加えられた、たがいに絡みあつたもの抑圧原因を問題にする。それらの抑圧原因の第一に挙げられるのは、敬虔主義の直接的・間接的影響である。そこでこの心理学小説の第一巻は、すでに紹介した前書きに続いていきなり敬虔主義的な世界を描きます。それは、時は主人公が、したがって作者自身が生れた一七五六年、場所は鉱泉保養地として知られるピュルモントのある貴族の邸である。フライシュバインの殿様と呼ばれる当主は、静観主義者とか、あるいは教会離脱主義者という名前で知られるある宗派の首領で、フランス静観派神秘主義の代表的人物グイヨン夫人の信奉者であつて、彼女の教えをひろめることを自分の最大の職務としている。この邸は彼の宗派のいわば本山であり、また実践の道場である。

「さて、この邸はそれ自体でひとつの小さな共和国をなして、たしかに周辺一帯の土地とはまったく別の掟が支配していた。世帯員は、身分の一番低い召使にいたるまで、みな自分自身の無（とグイヨン夫人はそれを呼んでいるのだが）のなかに立ちかえり、いっさいの煩惱を圧殺し、そしていっさいの自己を根絶することにひたすら努めているか、あるいは努めているように見える人々ばかりであつた。

この人々はみな毎日一回邸内のある大きな部屋に集つて、フライシュバインの殿様がみずから創めた一種の勤行をおこなつたが、それは全員がひとつのテーブルのまわりに坐つて、目をつぶつて頭をテーブルにつけ、およそ半時間、みずからのうちに神の声か、あるいは内なる言葉が聞こえないかどうか、じつと待つという式のものだった。そのとき何かを聞いたものは、それを他の者たちに報告した。

フライシユバインの殿様はまた一門の者たちが読む本も指定した。そして下男や下女のだれであれ、仕事ちゅうに十五分間もひまがあれば、必ずグイヨン夫人の著作のひとつ、内なる祈り、か何かについて書かれた本を手にして、沈黙考の姿勢ですわり、読んでいるのが見られた。

ほんの些細な家事にいたるまでのいっさいの営みは、この邸では真剣、厳格、壮重な外観をもっていた。すべての顔には、圧殺と否定が、すべての行為には、自己からの離脱と無への没入が見えると信じられていた。⁽⁸⁶⁾（傍点部は原文でイタリック）

前書きを読んで、作者の人間中心主義、個性尊重の姿勢を見てとった読者は、それとはまったく対照的な世界なかに引きづりこまれて、とまどいを感じざるをえないだろう。この描写は、たしかに敬虔主義者たちの世界を戯画化しているが、しかしその実態を想像させるには十分である。いずれにせよ、主人公がこのような世界に生れてきたことによつて、この小説の最初の問題提起がなされる。というのも、すでに略伝で述べたように、モリーツすなわち主人公の父は、フライシユバイン門下の急進的敬虔主義者であつて、ルター派正統教会の信者である母との間に生じた夫婦の宗教的対立から、家庭はすでに「悲惨の地獄」⁽⁸⁷⁾と化していて、そこに生れたアントーンは、「赤ん坊のときから抑圧されていた」⁽⁸⁸⁾からである。ベルントは自叙伝の始めの節で自分の人生を予め概観して、「惨めで哀れな人生」⁽⁸⁹⁾と規定し、そしてその人生の由来と展開を考察・分析したのであるが、それに対して、モリーツの自己把握は、抑圧された人生と呼ぶことができよう。両者のこの悲観主義的な人生把握に、またしてもベルントのモリーツに対する先駆的役割を認めることは、容易であろう。なお、モリーツのいう抑圧にはフロイト流の深層心理学的意味はまだないことに注意しなければならない。

さて、この「悲惨の地獄」に生れたアントーンの最幼年期の体験は、次のようなものである。彼の耳が聞いた最初の音は、「解くことを許されない絆に結ばれた夫婦が、たがいにのしりあう声だった」⁽⁹⁰⁾「彼は父と母をもっていたに

もかかわらず、最幼年期にすでに父と母から見すてられていた。父と母はたがいに憎しみあつてはいても、彼には等しく身近な存在だったので、彼はどちらに従い、どちらに頼ればいいのか、解らなかつたからである」〔最幼年期、彼は優しい両親の愛撫をあげわつたことは、ついぞなかつたし、何かの仕事でちよつとばかり骨折つても、ねぎらいの微笑を見せてもらったことも、ついぞなかつた〕〔彼は、両親の家へいったとき、不満と怒りと涙とそして嘆きの家へはいつたのだ〕⁽⁸³⁾ これらの印象から主人公が、どのような精神的ないたでを受けたことか、測り知れない。

この家庭的抑圧にさらに別の方面から抑圧が加重される。その主要なものとして、まず社会的・経済的原因、つまりありていと言えば、貧乏に起因する抑圧が挙げられる。というのは、両親の愛情に飢えた主人公は、せめて近所の同年輩の子供たちの友情を求めようとするが、その欲求も貧乏ゆえに充足されない。その事情を作者は次のように分析する。「彼が同じ年ごろの男の子を見ると、しばしば彼の魂のすべてはその少年に愛着した。彼はすべてを投げだしても、その少年の友だちになりたかつた。しかし、彼が両親からこうむっている軽蔑ゆえの気おくれと、貧乏たらしく汚れてすりきれた衣服ゆえの羞恥心に抑制されて、彼は自分よりも幸福な男の子に話しかける勇気がおこらなかつた。そんなわけで彼はほとんどいつも悄然として、ひとりぼっちで歩き回っていたが、それというのも、隣近所のだいていの男の子は、彼よりもきちんとした清潔で上等な服を着ていて、彼とつきあいたがらなかつたからである」⁽⁸⁴⁾ 要するに、貧乏たらしい服が恥ずかしいという劣等感が、他の子供たちとの交際を妨げたというのである。ユングの場合は、ほかの理由から交際を妨げられ、社会適合の機会を奪われたのであつたが、モーツもこうして社会適合の機会を奪われたことは同然である。貧乏ゆえの劣等感は、『アントーン・ライザー』全四巻を通じてしばしば主人公を悩まし、心の健全な生長と社会的な成功を妨げざるをえない。ちなみに、ハイネは『旅の絵』第二部で、このすでに当時世間から忘れさられていた小説（その題名をハイネは『フィリップ・ライザー』と誤記している・筆者）を評して、「作者が所有しなかつた、そしてそのために作者の人生が欠乏と断念の連続となつた、二、三百ターラーの

物語」と呼んでいるが、まさにこの作品は十八世紀ドイツが生んだ貧乏物語の傑作といふことができよう。

もう一つの抑圧原因は、腺病性の脚部疾患である。これは単に肉体的苦痛であるのみでなくて、右に述べた社会的経済的要因と絡みあって、現実感覚の発達と社会的成長を阻害する結果になる。というのも、病気のため戸外で他の子供たちと遊ぶことのできない主人公は、現実世界から遮断されて、代りに読書に熱中して、ユングの場合と同様に、ひたすら空想的な世界に誘いこまれていったからである。

以上、抑圧の原因として主要なものを三つ抽出したが、これらはいずれも主人公が生れたあと外部から加えられたものであって、彼はもともと自然から健全な心身を与えられて生れてきたのだ、とモーリツは確信していた。それは、「彼の自然からうけたすぐれた素質」⁽⁸⁶⁾、「生への生来の愛」⁽⁸⁷⁾、「あらゆるものを治癒する自然はここでもまた、恩寵が台なしにしてしまったものを、ふたたびゆっくり修復しはじめた」⁽⁸⁸⁾というような表現から明らかである。しかし、これらの表現は、今はそれらの抑圧を克服して別人となった作者の観察であって、主人公すなわち幼い日の作者は、現実抑圧に悩まされざるをえなかったのである。子供は抑圧を抑圧として認識し除去するすべを知らないで、ただ苦しむばかりである。あるいは、せいぜいのところ、本能的にそれを避けて、まちがった方向へ逃げるくらいである。こうして子供の心情は歪んで生長するが、おとなはほとんどそれに気がつかない。そういうおとなたちに注意を呼びかけ、子供たちを正しい方向へ導く方法を考えさせようというのが、この小説におけるモーリツの教育的意図であって、なにかの徳目を積極的な教育的価値として主張することが彼の目的ではない。

そこでまず、幼年期の彼の心を歪ませ、ついには彼を自殺未遂事件にまで追いこんだ敬虔主義の影響への考察が、小説第一巻の最大部分を占めることになる。その影響の過程を概述すると、父親がアントーンに敬虔主義的教育をほどこし始めたのは、ユングの場合にくらべてかなり遅く、彼の最初の発病に前後する七、八歳ころのことである。教育方法もむしろ粗雑で、手近な宗教書を与えて自分で読ませるといふ程度であったが、息子はもちまえの空想力を働

かせて宗教的な世界へ入っていった。彼が読んだ本の種類や、またそこから受けた直接的な影響は、ユングの主人公の場合とかなり似かよっている。たとえば、アルノルトの『古への教父たちの生涯』を読んだアントーンは、それによって聖アントニウスを知り、あこがれて、この聖者のもとへ旅しよう、家を出たものの、百歩あるいて脚の痛みを耐えかねて、戻らざるをえなかったのである。しかし彼の読書のなかで、筆者が特に興味をひかれるのは、ある一冊の小冊子である。それは作者自身が書名を忘れてしまったほどの無名の書物であるが、「幼少年時代の敬神について書いたもので、六歳から十四歳までのあいだに、どのようにして信心を増大させることができるか、教示するものだった。この小冊子の各章は、『六歳児のために』、『七歳児のために』、以下同様の題がついていた。そこでアントーンは『九歳児のために』の章を読んで、自分が敬虔な人間になるにはまだ手遅れではないが、しかしもう三年も無為にすごしてしまったことに気がついた⁽⁸⁸⁾」というのである。筆者が興味をひかれるのは、もともと反俗的な敬虔主義の世界で、このような通俗的、実用的な信仰案内書が流布していたという事実である。いずれにせよ、主人公はこれを読んで、「魂をゆり動かされて、回心しようと固く決意し⁽⁸⁹⁾」て、「そのときから、祈禱、服従、忍耐、秩序等々について、その本に書かれているすべてのことをこの上なく几帳面に守って、そして一歩でも速く歩きすぎると、それをほとんどすべて罪悪と考えた⁽⁹⁰⁾」。しかし彼のこのような実践は、真の信仰心に発するものとはいえない。というのも、もともと、「この小冊子では、敬神の前進は、階級が一つ一つ上昇することを喜ぶというような、いわば名誉心に属することがらとして書かれていた⁽⁹¹⁾」からである。名誉心が自己心の一樣態であることは、いうまでもない。そういう名誉心に訴えて敬神を前進させようとするこの小冊子のやり方は、たとえばグイヨン夫人の自己圧殺の教えと明らかに矛盾する。若い主人公はこの矛盾に気づくことなく、名誉心から敬虔な人間になるべく熱中していたのである。

父は主人公にさらにグイヨン夫人の讚美歌集、次いで同夫人の『内なる祈りのための指針⁽⁹²⁾』を与えたが、これは彼の

敬虔主義の実践をいっそう促がすことになる。彼は神と対話し、「本来の内なる声」(傍点部は原文イタリック)を聴くために目をとじて、いっさいの思念をたつ修練をはじめ、「やがて、思念をかなり取りさつたと信ずるまでになり、そして今やかなり親密に交わるようになった神とじっさいに対話することを始めて」、散歩や仕事やまた遊びのときでも一日中、一種の愛と信頼をもって神と、まるで同輩と話すように、対話を交わしたというのである。彼の読書のなかには、『美しいパニーゼ』などの物語本もまじっていて、彼を熱中させた。こうして彼の頭のなかでは、聖俗まじりあって一種異様な空想世界が形づくられていたであろうことは想像にかたくない。

アントーンが自分の将来について初めて関心をいだくのは、十二歳で公立学校の無料授業にかよってラテン語を学びはじめたところである。ラテン語でたちまち頭角をあらわした彼は、「生れて初めて自分のまゝに栄光の道がひらけるのを見」て、そして将来は学問の道に進もうという志望を頭にしっかりと植えつけたのである。そのような主人公を父親が徒弟奉公に出した理由は二様である。第一は、すでに職人になっている二人の異母兄同様に主人公も家から出さざるをえないという経済的理由、第二は父親自身と同様にフライシュバインの信奉者であるローベンシュタイン親方によって、息子の信心を促進強化してもらいたいという、宗教的・教育的理由である。それに対して主人公自身が聞かされていたのは、親切な親方のもとの実の子供のような待遇をうけ、軽いお上品な仕事をするだけで、学校へもかよわせてもらえる、ということだった。彼は学校で抜群の成績をあげれば、自分のために学問への道がおのずから開かれるであろうと確信し、新しい町へ移ることに魅力を感じて、住みあきたハノーファーを去ったが、しかし彼の期待は完全に裏切られた。

主人公がローベンシュタイン親分のもとで体験したものを一語に要約すれば、敬虔主義の地獄ということができよう。彼は最初から「最も下等な仕事」に酷使されたが、しかし労働そのものを嫌ったわけではなく、むしろ働くこと

に一種の満足をおぼえ、初めのうちは、やがて職人になって遍歴する日をたのしみに思いさえしたのである。親方も一時期は彼を寵愛し、彼の信仰生活を指導して、回心に導びこうとしてさまざまの助言を与え、彼自身もその気になつて、信心深くなろうと努めさせしたのである。しかしこの親方は、敬虔主義者の否定的な特性をすべて備えた小市民でしかなかった。それは、「宗教的熱狂」⁽⁹⁶⁾、「偏狭と人間嫌い」⁽⁹⁶⁾、「極端に心気症的な狂信者、彼は予兆を信じ、幻を見て、それがしばしば彼に恐怖と戦慄を呼びよせる」⁽⁹⁷⁾、「猜疑心が強く、人を信用しない男」⁽⁹⁸⁾というような表現によつて示されている。要するに、彼は迷信ぶかい偽信心家にすぎない。ただし、ここで注意すべきは、これらの表現はすべて、現在執筆中のモーリツの観察であつて、十二、三歳の主人公が、「厳格な主人兼親方」⁽⁹⁹⁾の「冷たい、無味乾燥な、圧制者的な顔貌」⁽⁹⁹⁾の奥にひそむ陰險な性格を見抜くだけの世間知を、すでもつていたとは考えられない。彼は、他の使用人の告げ口によつて親方の寵愛を失つてのちは、以前にもまして酷しい労働と、宗教に名をかりた親方の精神的威圧によつて、心身ともに疲れはてる。その状態を語り手は次のように述べている。

「こうして、アントーンは十三歳にして、神の恩籠がその選りぬきの道具を通じて彼に与えたもうた特別の指導きによつて、完全に心気症患者になつてしまつた」⁽¹⁰⁰⁾ この言葉もまた、敬虔主義の地獄をすでに脱したモーリツの痛烈な皮肉である。彼は、「恩籠」、「摂理」、「先慮」、「神の道具」というようなものをもはや信じない。現在の彼にとつては敬虔主義の教えは、自然の理法、人間の本性に反するイデオロギーにすぎないのである。だから彼はこの小説において、たとえばユングならば「先慮の導きによつて」とか、「神の恩籠によつて」というであらうところを、「本当の幸運」⁽¹⁰¹⁾とか、「偶然」⁽¹⁰¹⁾と書くのである。「先慮」、「摂理」、「恩籠」という語が見えることもままあるが、それは右の引用に見るように皮肉あるいは嘲笑であるか、または「物事の慈悲深く賢明な摂理により」⁽¹⁰²⁾というような世俗化された意味である。いずれにせよ、心気症患者同然になつてしまつた主人公は、「いついかなる瞬間も生きたまま死につつある」⁽¹⁰³⁾（傍点部は原文でイタリック）状態におちいつたのである。

アントーンの人生における最初の大きな挫折と呼ぶべき自殺未遂事件は、右のような状態のなかでおこった。その事情はこうである。ある日ローベンシュタイン親方は、アントーンに兵隊帽をつめこんだ大きな籠を背負わせて軍需品倉庫へ納品に赴いたが、そのときアントーンにとつて、公道道を重い荷物にあたかも軛をかけられたごとくに頭を屈して歩く自分の姿を衆目にさらすことは、耐えきれない屈辱と感ぜられた。それ以後、彼はまったく人間嫌いになり、人々の喜びの声を逃れて帽子工場のうらを流れるオーカー川のほとりに立って、水の流れを何時間も見つめていくというようになって、やがてある日、立っている膝の力がぬけて、川に転落した。たまたまそれを同輩の徒弟が見ていたので、彼は助けあげられた。この件について物語の記述には、自殺という語はどこにもないが、これが、敬虔主義のイデオロギーが幼い心情に及ぼした抑圧からの逃避の試みであったことはたしかであろう。ローベンシュタインをはじめ人々が、これを自殺未遂と見たことは明らかで、主人公はまもなく「危険な人間」⁽¹⁰⁾として実家に帰されたのである。

それ以後のアントーンの人生の歩みは、すでに作者略伝に見たとうりである。それは栄光と屈辱、成功と挫折のくり返しであるが、最終的には演劇家志望が完全にやぶれることで、この物語は中断される、いや中断されざるをえないのである。『アントーン・ライザー』はあくまでも挫折をえがく小説であつて、主人公の、したがつて作者自身の再起は、もはやこの小説の世界には所属しないからである。この小説のその後の歩みの範囲内で最も注目すべきは、物語の後半が、挫折にいたる俳優志望を細密に観察・分析することによつて、すぐれた芸術家小説ともなつていゝことである。しかし、それについて触れる紙数の余裕はもはやない。

さて、『アントーン・ライザー』は心理小説として、あるいは芸術家小説として、その近代的性格が再評価されつつあるが、たしかに同時代に書かれたユングの自伝小説とくらべても、その点は明白である。このような近代性のもう

一つの側面は、たとえば貧乏に起因する抑圧というような、人間存在に対する社会的経済学的観点である。その意味で、モーリツの心理学は、単に生理学的心理学だけではなくて、社会、心理学の要素を多分に含んでいると言うことができる。それだけではない。彼は、敬虔主義イデオロギーの経済的効用とも呼ぶべきものまでも、すでに見抜いている。彼はそれを、たとえばローベンシュタインが使用人たちをいつその勤勉へうながし、それによってより多くの生産と利潤を得るやり方に見てとる。つまり、親方はしばしば使用人たちにながながと説教をたれ、いとも敬虔な身ぶりで祝福と劫罰を与えるのだが、その真の狙いは、「もし使用人たちが地獄の火に永遠に身をやかれたくないならば、奉公人として仕事に没頭し、誠実をつくすように、と誠しめることであつた」⁽¹⁰⁶⁾というのである。モーリツがこの小説のなかで、社会体制に対して直接に抗議をするのは、ただ一か所しかない。それは、高等中学校時代の主人公が家庭教師として教えていたある貴族の少年から、こなまいきな態度を見せつけられて、自尊心をひどく傷つけられたときのことである。作者は次のように述べている。「この際、彼の心をとらえ、自分の人生をいとわしいものに思わせたのは、平民の境遇ゆゑに抑圧された人間全部の感情であつた——(中略)——自分もまた、他のたくさんの人間たちが気をつかい、世話をしなくてはならない人間に生れなかつたのは、自分が生れるまえに何か犯罪でもおかしからだらうか、——よりにもよって自分が働く者の役割をもらつて、ほかの人間が賃金を払う者の役割をもらつたのは、なぜだらうか——」⁽¹⁰⁶⁾(後略)〔傍点部は原文でイタリック〕

このような直接的な叫びは、むしろ例外であるが、しかし作品全体の基底に潜流する社会批判の精神を読みとることは、容易である。このような社会批判の要素は、モーリツの心理学の先駆者ベルントの自叙伝では稀薄である。そこで、この方面における彼の先駆者として想起されるのが、ヨーハン・クリスタアン・エーデルマンである。彼は、「キリスト教と聖職者を嘲笑した」⁽¹⁰⁷⁾として世に指弾され、官憲の追究をうけて逃亡中の一七四九年に、自叙伝を書きはじめたが、もとはといえば、敬虔主義に親近感をいだく神学者であつた。彼の自叙伝についても筆者はさき

に紹介の小論⁽¹⁰⁷⁾を書いたので、ここでは詳しく触れないが、彼の生涯は、同時代人たちの指弾にもかかわらず、真理を求めて遍歴する求道者のそれであつた。すなわち、学生時代に正統派の信仰に疑惑をいだいて敬虔主義に接近したエーデルマンは、その後真理を求めてヘルンフートの同胞教団、ベルレブルク在住の教会離脱主義者、神靈感応者の各集団を巡訪したが、この最後の神靈感応者たちとの苦しい対決の過程で、「神は理性である⁽¹⁰⁸⁾」というみずからの真理を発見して、敬虔主義をも批判する立場を獲得したのである。しかしこの理性主義の立場にもかかわらず、彼は自分の人生の変転をかえりみるとき、それが神の先慮の導きであると信ずるのであり、その限りにおいて、彼の自叙伝は、敬虔主義的自叙伝の系列に属すると見なければならぬ。

モリーツはエーデルマンの自叙伝を読んでいない（この自叙伝が世に現れたのは、一八四九年のことである）。したがって彼がエーデルマンから何かを学んだ、ということはありえない。にもかかわらず、筆者がエーデルマンをベレントとならべて、モリーツの先駆者として挙げるのは、エーデルマンの社会的経済学的視点がまさにモリーツのその先駆と見なされるからである。前者の自叙伝から社会批判の一例を見よう。彼は青年時代にながらくオーストリアで家庭教師を勤めたが、その赴任の途上、彼が乗った乗合馬車がバンベルクの町へ入るときと出るとき、数十人の乞食の群にとりかこまれて立往生し、乗客はみな持ちあわせの小銭をぜんぶこの哀れな人々に分けあたえて、やつと馬車は通過することができた。そこで彼はしるす。「その（＝乞食たちの存在の・筆者）一方では、教会のなかの死んだ聖者（＝聖者像）たちは金や銀をびかびか着飾り、その奉仕者（＝僧侶）たちは、贅沢三昧にくらしているのだ⁽¹⁰⁹⁾」このような教会ないし社会への批判のほか、彼は時おり経済学的観察も試みる。たとえばオーストリアの田舎に滞在中にはしばしば近隣のカトリック修道院を訪問したが、その際は頭のなかでその修道院の経済について、修道院領からあがるぶどう酒その他の農産物による年収を見積って、その豊かさに驚いている。このような社会的経済学的観点は、エーデルマン以前の敬虔主義的自叙伝にはほとんど見られないものであるが、いったい彼はどこからその

ような視点を獲得したのだろうか。この問いに対して筆者は、想像によってしか答えを見出すことができないが、恐らくそれは彼自身の青少年時代の貧乏の体験から得られたものであるまいか。ワイセンフェルスの公爵家に仕える貧しい宮廷音楽師兼小姓教育係を父として生れたエーデルマンは、家庭の貧困ゆえに幾度か自分の志望を断念しなければならなかったが、その反面で、いわば貧乏によって鍛えられ、世の中の事象を経済的側面から観察する眼を養ったであろうことは、想像にかたくない。経済学的観点とは、つまりは一つの物質主義的合理精神にほかならない。この合理精神が社会の矛盾に出会うとき、そこに社会批判の眼が開かれるのは、容易であろう。

モーリツが生れたのは、エーデルマン家以上に赤貧の家である。彼は貧乏の体験をより多く心理学的に、つまり屈辱感情と結びつけて描いているが、しかしその反面でエーデルマン同様に社会的経済学的な視野を開かれたであろうことは、十分に想像される。少くとも、すでに述べたような社会への抗議ないし批判は、そのような視野なしには考えられない。

モーリツをエーデルマンに結びつけるもう一つの顕著な共通体験は、敬虔主義の地獄である。前者はこの地獄をより悲惨なやり方でフライシュバインのもとで体験したが、後者はこれを、オーストリア滞在中の一時期家庭教師を勤めたウィーンの商人ミュールの家で経験した。彼がハレ派敬虔主義を信奉するこの一家に見出したものは、結局のところ反理性的な迷信と極端な偽信仰でしかなく、彼はそれに激しい嫌悪を感じたが、とりわけ自己神聖視するミュール夫人の厳格主義に自分の自由が圧迫されるのを感じて、半年ほど勤めただけでこの家を去ったのである。当時の彼は、敬虔主義の理念にはつよく惹かれていたが、しかしその実態に触れたことは、のちの敬虔主義批判に大きく寄与したと見ることができよう。モーリツの場合にも同じことが言えるのである。

もちろん、モーリツとエーデルマンの間には、相反する体験もいくつかある。たとえば前者が幼年時代に両親の愛撫を知らなかったのに対して、後者は両親の、とりわけ母親のやさしい愛情をうけて育ったことを、誇らかに告白し

ている。幼年期の体験のこのような大きな違いは、両者の人生を生きる根本的な姿勢の大きな差異を生まざるをえなかったと考えられるが、しかし右に挙げたような両者に共通の体験が、共通の社会的視点と宗教批判を両者にもたらしたという推論から、筆者はエーデルマンをモーリッツのかくれた先駆者とあえて呼ぶのである。

以上見てきたように、ユングHシュテイングとK・Ph・モーリッツは、ともに敬虔主義の強い影響下に生育し、その体験をえがくことよって作家として出発したが、しかし二人のその作品は、たがいになつた対照的な小説となつた。すなわち、『ハインリヒ・シュテイングの伝記』はその第一作『幼年時代』におけるいかにもシュトゥルム・ウント・ドラング期にふさわしい素朴で清新な印象にもかかわらず、最後は功なり名とげた老学者の、内心の不満をおおいかくした、無味乾燥な自伝的回想に終らざるをえなかったのに対して、『アントーン・ライザー』は、作家というよりもむしろ科学者にふさわしいような徹底的な観察・分析を通じて人間存在のさまざまな問題をえぐり出すことよって、時代を先取る近代的な小説となつたのである。このような対照をもたらししたそもその原因が、それぞれ作者の敬虔主義に対する姿勢に求められることは、もはや言うまでもないであろう。ユングは敬虔主義的信条をあくまでもおし通すことよって、作品の文学的価値を損ない、モーリッツは敬虔主義を批判し対決することよって、自己の作家としての立場を獲得したのである。『アントーン・ライザー』の読者にとって最も気懸りなことのひとつは、作者によつてはもはや書かれなかった、演劇志望に最終的にやぶれた主人公のその後の運命であろう。この小説が中断された時点から、主人公すなわちモーリッツの敬虔主義克服への真の苦闘が開始されるのであるが、その過程の解明は、この小説をも含めた彼の諸作品の検討に俟たなければならない。

- (一) Johann Heinrich Jung の自伝体小説の原題を「素養年次表のよきとてん」。
1. Heinrich Stillings Jugend. Eine wahrhafte Geschichte. 1777.
 2. Heinrich Stillings Jünglings-Jahre. Eine wahrhafte Geschichte. 1778.
 3. Heinrich Stillings Wanderschaft. Eine wahrhafte Geschichte. 1778.
 4. Heinrich Stillings häusliches Leben. Eine wahrhafte Geschichte. 1789.
 5. Heinrich Stillings Lehr-Jahre. Eine wahrhafte Geschichte. 1804.
 6. Heinrich Stillings Alter. Eine wahrhafte Geschichte. Oder Heinrich Stillings Lebensgeschichte Sechster Band. Herausgegeben nebst einer Erzählung von Stillings Lebensende von dessen Enkel Wilhelm Schwarz... 1817.
- (二) Anton Reiser. Ein psychologischer Roman. Herausgegeben von Karl Philipp Moritz.
- (三) „die Stillen im Lande“ 野田梁・熊澤忠・久松田米十郎。
- (四) Jeanne Marie Bouvières de la Mothe Guyon (1648-1717).
- (五) Philipp Jacob Spener (1635-1705).
- (六) collegium pietatis.
- (七) Spener: Pia desideria oder herzlichcs Verlangen nach gottgefälliger Besserung der wahren evangelischen Kirche nebst einigen dahin abzweckenden christlichen Vorschlägen. 1675.
- (八) August Hermann Francke (1663-1727).
- (九) Nicolaus Ludwig Graf von Zinzendorf und Portendorf (1700-1760).
- (一〇) Johann Albrecht Bengel (1687-1752).
- (一一) Friedrich Christoph Oetinger (1702-1782).
- (一二) Gerhard Tersteege (1697-1769).
- (一三) D. Martin Luther: Die gantze Heilige Schrift, hrg. von Hans Volz, München 1974, Bd. 3, S. 2258.
- (一四) A. a. O., S. 2256.
- (一五) Personalia od. Lebenslauf.
- (一六) Spener: Eigenhändig aufgesetzter Lebenslauf.

(15) Das Leben der Gläubigen/Als Der Weyland Hochwürdige/in Gott Andachtige und Hochgelahrte Theologus, HERR Philipp Jacob Spener/... Frankfurt am Mayn/Gedruckt bey Johannes Wust/Anno MDCCV, S. 31-48
註本。

(16) A. a. O., S. 40.

(17) Johann Wilhelm Petersen (1649-1727) u. Johanna Eleonore Petersen, geb. von Merlau (1644-1724).

(18) Francke: Anfang und Fortgang der Bekehrung A. H. Franckes, von ihm selbst beschrieben.

(19) Marianne Beyer-Fröhlich (ed.): Pietismus und Rationalismus (Deutsche Literatur in Entwicklungstreihen, Reihe Deutsche Selbstzeugnisse, Bd. 7) Leipzig 1933, S. 290. 註本。

(20) Johann Heinrich Jung-Stilling: Lebensgeschichte. Vollständiger Text nach den Erstdruckten (1777-1817). Mit einem Nachwort von Wolfgang Pfeiffer-Belli, Winkler-Verlag München 1968 (註本 JS: LG 註本), S. 205.

(21) JS: LG. S. 448.

(22) 木下三之丞 著 小説のそと (註本) 小説のそと (註本)。

(23) Johannes Friedrich von Fleischbein (1700-1774).

(24) Karl Philipp Moritz: Anton Reiser. Ein psychologischer Roman. Mit Textvarianten, Erläuterungen und einem Nachwort herausgegeben von Wolfgang Martens. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1972. (註本 AR 註本) S. 355.

(25) Johann Bernhard Basedow (1724-90).

(26) Moses Mendelssohn (1729-86).

(27) Salomon Maimon (1753-1800).

(28) Marcus Herz (1747-1803) und Henriette Julie Herz, geb. de Lemos (1764-1847).

(29) Moritz: Reisen eines Deutschen in England im Jahr 1782, Berlin 1783.

(30) *TRAGÖDIE DER ERFAHRUNG* oder Magazin zur Erfahrungsgelenkunde als ein Lesebuch für Gelehrte und Ungerlehrte... hrsg. von Carl Philipp Moritz. Berlin 1783-1793.

(31) Jean Paul: Schulmeisterlein Maria Wuz, 1793.

(32) J. H. Jung-Stilling: Henrich Stillings Jugend, Jünglingsjahre, Wanderschaft und häusliches Leben. Mit einem Nachwort und Anmerkungen von Dieter Cunz. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1968, S. 377 註本。

- (32) JS: LG. S. 254.
 (33) JS: LG. S. 270.
 (34) Rückblick auf Stillings bisherige Lebensgeschichte.
 (35) JS: LG. S. 467.
 (36) JS: LG. S. 478.
 (37) J. H. Jung-Stilling: H. Stillings Jugend... S. 377 f. 人物誌°
 (38) JS: LG. S. 273.
 (39) JS: LG. S. 467.
 (40) JS: LG. S. 10.
 (41) JS: LG. S. 6.
 (42) JS: LG. S. 9.
 (43) JS: LG. S. 10.
 (44) JS: LG. S. 24.
 (45) JS: LG. S. 28.
 (46) JS: LG. S. 35.
 (47) JS: LG. S. 36.
 (48) JS: LG. S. 39.
 (49) JS: LG. S. 39 f.
 (50) Gottfried Arnold (1666-1714): *Vitae patrum, oder Das Leben der Altväter und anderer gottseligen Personen.* Halle 1700.
 (51) Johann Heinrich Reitz (1655-1720) (ed): *Die Historie der Wiedergeborenen.* 1717.
 (52) JS: LG. S. 40.
 (53) JS: LG. S. 41.
 (54) JS: LG. S. 69 f.
 (55) JS: LG. S. 82.
 (56) JS: LG. S. 43.
 (57) JS: LG. S. 110.

- (83) JS: LG. S. 127 f.
 (83) JS: LG. S. 128.
 (83) JS: LG. S. 145.
 (13) JS: LG. S. 155.
 (82) JS: LG. S. 157 f.
 (83) JS: LG. S. 159.
 (73) JS: LG. S. 169.
 (82) JS: LG. S. 176.
 (83) JS: LG. S. 188.
 (75) JS: LG. S. 270.
 (83) JS: LG. S. 277 f.
 (83) JS: LG. S. 448.
 (72) JS: LG. S. 341.
 (71) AR: S. 6.
 (71 a) 伊藤『ノーダム・ヘルントの自叙伝——敬虔主義の心理学——』九州大学文学部紀要『文学研究』第七十六輯(昭和五十四年)所収。
- (82) Adam Bernd: Eigene Lebens-Beschreibung, hrsg. von Volker Hoffmann, Winkler Verlag München 1973. S. 2.
- (82) Fragment aus Anton Reisers Lebensgeschichte. vgl. AR: S. 503-508.
 (74) Erinnerungen aus den frühesten Jahren der Kindheit. vgl. AR: S. 508-511.
 (82) Fragment aus Anton Reisers Lebensgeschichte. vgl. AR: S. 511-525.
 (79) Fortsetzung des Fragments aus Anton Reisers Lebensgeschichte. vgl. AR: S. 525-534.
 (79 a) AR: S. 277.
 (77) Bernd: Eigene Lebens-Beschreibung. S. 18.
 (81) AR: S. 8.
 (87) AR: S. 11.
 (88) AR: S. 12.

- (17) Bernd: Eigene Lebens-Beschreibung. S. 16.
 (22) AR: S. 12.
 (32) AR: S. 13.
 (28) AR: S. 14 f.
 (52) Heinrich Heine: Sämtliche Schriften, Bd. 3. Hanser Verlag München 1976. S. 218.
 (38) AR: S. 87.
 (25) AR: S. 89.
 (88) AR: S. 90.
 (83) AR: S. 19.
 (95) AR: S. 19 f.
 (15) AR: S. 20.
 (26) AR: S. 22. 参考
 (35) AR: S. 23.
 (7) AR: S. 44.
 (55) AR: S. 58.
 (95) AR: S. 62.
 (75) AR: S. 64.
 (86) AR: S. 68.
 (66) AR: S. 57.
 (80) AR: S. 90.
 (80^a) AR: S. 335.
 (10) AR: S. 25.
 (20) AR: S. 60.
 (30) AR: S. 90.
 (10) AR: S. 103.
 (50) AR: S. 63.
 (90) AR: S. 366.

(101) 伊藤『ヘーレンマンの自叙伝——敬虔主義から啓蒙主義へ——』『文学研究』第七十七輯（昭和五十五年）所収。

(102) Johann Christian Edelmann: Selbstbiographie. Faksimile-Neudruck der von C. R. W. Klöse veranstalteten Ausgabe Berlin 1849; neu herausgegeben, kommentiert und mit einem Nachwort versehen von Bernd Neumann. Stuttgart-Bad Cannstatt 1976. S. 3.

(103) A. a. O., S. 274.

(104) A. a. O., S. 55.

参考文献（並びもびたものも含め）

Johann Wolfgang von Goethe: Aus meinem Leben Dichtung und Wahrheit.

Ders.: Italienische Reise.

Ders.: Briefe.

Werner Mahrholz: Deutsche Selbstbekenntnisse. Ein Beitrag zur Geschichte der Selbstbiographie von der Mystik bis zum Pietismus. Berlin 1919.

Fritz Stemmle: Die Säkularisation des Pietismus zur Erfahrungsseelenkunde, in: ZfdPhil 72 (1953).

Hans Joachim Schrimpf: Moritz • Anton Reiser, in: Der deutsche Roman. Vom Barock bis zur Gegenwart. Struktur und Geschichte I., hrsg. v. Benno von Wiese. Düsseldorf 1963.

Ders.: Karl Philipp Moritz. Stuttgart 1980.

Martin Schmidt u. Wilhelm Jannasch (ed.): Das Zeitalter des Pietismus. Bremen 1965.

August Langen: Der Wortschatz des deutschen Pietismus, 2. ergänzte Aufl. Tübingen 1968.

Ingo Bertolini: Studien zur Autobiographie des deutschen Pietismus. Dissertation (Ms.). Wien 1968.

Martin Greschat (ed.): Zur neueren Pietismusforschung. Darmstadt 1976.

付記 昭和五十六年十月六日松山市にて開催された日本独文学会研究発表会において口頭発表された『ドイツ自伝小説の源流への一考察』は、本稿の要約によるものである。